高山市埋蔵文化財調査報告書第18号

鷹ノ巣遺跡A・B地点
鷹ノ巣古墳
発掘調査報告書

1990

高山市教育委員会

目　次

例言

第1章　発掘の経過 …… 2

第2章　遺跡の地形と地質

第1節　地形 …… 3

第2節　地質 …… 4

第3章　遺構

第1節　位置 …… 6

第2節　鷹ノ巣古墳 …… 6

第3節　鷹ノ巣遺跡A地点 …… 6

第4節　鷹ノ巣遺跡B地点 …… 7

第5節　遺構のまとめ …… 9

第4章　遺物

第1節　早期の土器 …… 12

1類　押型文土器 …… 12

2類　含センイ撚糸文土器 …… 16

3類　含センイ条痕文土器 …… 16

4類　波状沈線文土器 …… 16

5類　無文土器 …… 16

押型文土器のまとめ …… 18

第2節　中期の土期 …… 20

1類　竹管文土器 …… 20

2類　蓮華文土器 …… 20

3類　隆帯文土器 …… 20

4類　刺突文、撚糸文土器 …… 20

5類　条線文土器 …… 20

6類　縄文土器 …… 20

7類　無文土器 …… 20

第3節　遺構の遺物 …… 23

第4節　石器 …… 25

挿図目次

挿図1　鷹ノ巣洞の土地利用図 …… 3

挿図2　地形断面図 …… 4

挿図3　高山盆地東部の地質説明図 …… 4

挿図4　遺跡付近の地質略図 …… 5

挿図5　遺物包含層断面図 …… 5

挿図6　位置図1 …… 6

挿図7　位置図2 …… 6

挿図8　鷹ノ巣・字絵図 …… 7

挿図9　鷹ノ巣遺跡B地点土層断面図 …… 8

挿図10　鷹ノ巣遺跡B地点遺構図 …… 10

挿図11　断面図D-D′ E-E′ …… 11

挿図12　第1号土壙（SK1）遺構図 …… 11

挿図13　P_1（ピット）断面図 …… 11

挿図14　押型文土器1 …… 14

挿図15　押型文土器2 …… 15

挿図16　押型文土器3 …… 16

挿図17　早期の土器 …… 17

挿図18　中期の土器1 …… 21

挿図19　中期の土器2 …… 22

挿図20　第1号土壙（SK1）の遺物 …… 23

挿図21　Ⅳ層の遺物 …… 24

挿図22　B8、P_1 の遺物 …… 24

挿図23　石　器1 …… 26

挿図24　石　器2 …… 28

例　言

1．　本書は、平成元年４月25日から６月29日まで現地発掘調査を実施した埋蔵文化財包蔵地
岐阜県高山市江名子町2727～2728番　鷹ノ巣遺跡Ａ地点（岐阜県遺跡台帳G12T00603）
〃　2692　番　〃　Ｂ地点（　〃　）
〃　2734―71　番　鷹ノ巣古墳　（岐阜県遺跡台帳G12T00602）
の発掘調査報告書である。

2．　遺跡該当地区内に工場団地が建設されるため、事業者である株式会社飛騨庭石、代表取締役中田金太氏に発掘調査費用の協力をいただき、工事に先立ち㈱飛騨庭石より委託を受けて発掘調査を行なったものである。

3．　調査主体　高山市教育委員会　指導　岐阜県教育委員会　文化課
調査団　高山市教育委員会　教育長　谷脇豊蔵　調査担当者　田中彰

4．　本文の執筆は第１・３・５章を田中彰が担当し、第２章を高山考古学研究会会長石原哲弥氏、第４章を高山考古学研究会吉朝則富氏に執筆していただいた。

5．　本編の挿図作製、図版の写真撮影は田中彰が行なった。方位は磁北とした。

6．　発掘調査にご理解とご協力をいただいた㈱飛騨庭石・中田金太氏、土地所有者の保木泉一氏、藤本健三氏に感謝の意を表する。

第１章　発掘の経過

昭和63年11月21日、㈱飛騨庭石から埋蔵文化財包蔵地内での工場団地造成工事の届出を文化庁へ提出する。（文化財保護法第57条の２第１項）昭和63年11月25日、県教育委員会から工事に先立ち発掘調査を実施するよう通知有り。平成元年４月11日、調査は高山市教育委員会が㈱飛騨庭石より委託を受けて実施する旨、協定書を締結した。平成元年４月６日文化財保護法第98条の２第１項の規定により、発掘調査の通知を提出した。

平成元年４月25日から現地発掘調査を開始した。以下その概要を記する。

４月25～５月８日　鷹ノ巣古墳土層調査、事前測量、写真撮影。
５月９～　10日　〃　周囲の立木伐採、柱状図作成。11～12日　Ａ地点土層調査
13～　16日　現在の台地状畑の内、中央部（鷹ノ巣遺跡Ｂ地点）調査開始。
17～　21日　深層部に、押型文土器を包含する層を発見。
22日　江名子小学校６年生、遺跡発掘の実習、見学。
23～６月７日　鷹ノ巣遺跡Ｂ地点に押型文土器検出、遺構実測。８～29日　補足調査
30日～　歴史民俗資料館高山市郷土館内で遺物整理を行ない、報告書作成に着手。

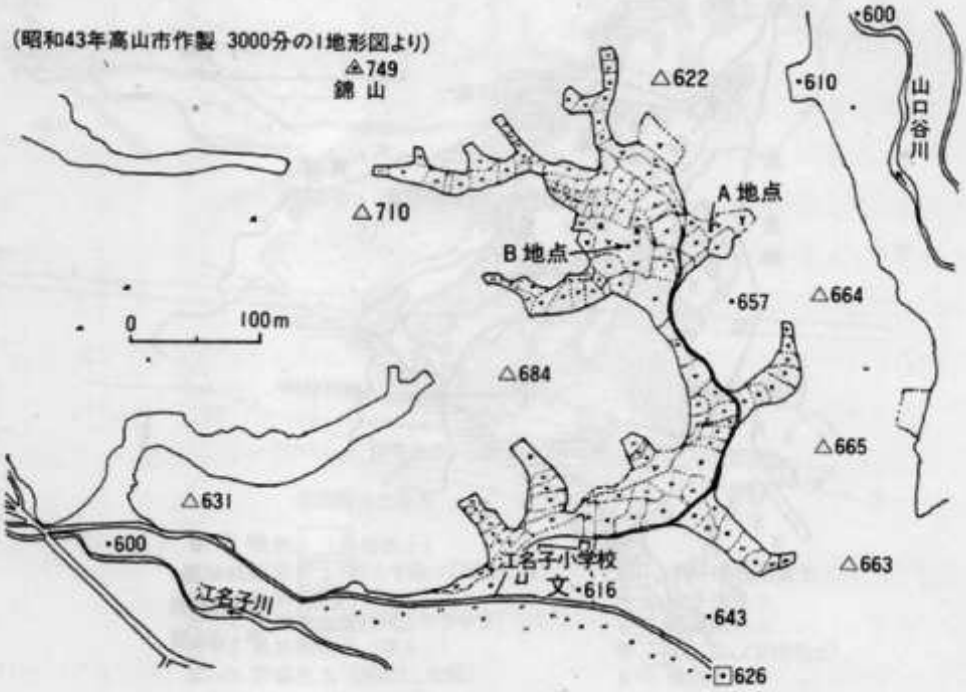
第２章　遺跡の地形と地質

第１節　地形

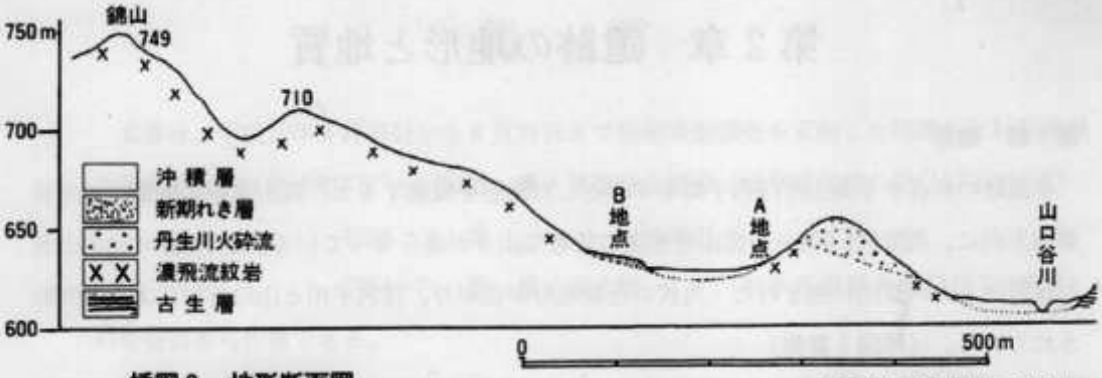
本遺跡の所在する高山市江名子町を中心とした地形を概観すると、高山盆地の南側にはほぼ東西方向に、高度約1,000ｍの位山分水嶺の急峻な山々が連らなっている。分水嶺の北側山麓には宮川と大八賀川に囲まれた三角状の丘陵地形が広がり、江名子川と山口谷川によって開析されている。（挿図３参照）

分水嶺は活断層である江名子断層の第四紀以降の活動によって、右ずれ変動を伴い、約300ｍ～400ｍに及ぶ垂直変動によって形成された傾動地塊である。(註１) こうした上昇運動によって、北側へ約1.5㎞の幅にわたって崖錐性の礫層が、水田化された沖積層を見おろす丘陵に分布し上部を火山灰層が覆っている。

本遺跡の所在する江名子町鷹ノ巣は、錦山（749ｍ）の南東麓にあたり、挿図１の水田、畑の土地利用図で見られるように、江名子小学校の北に錦山山塊をとり廻いた形の洞が入り込んでおり江名子川流域からは隠れ洞のような地形を呈している。挿図１は昭和40年代の整地作業実施前の土地利用図で、窪地のほぼ中央部西側に高台が張り出しており、ここがB地点である。谷を挟んで東側の緩傾斜地に位置するＡ地点を少し登ると、山口谷川と江名子川流域の分水尾根の鞍部に至る。挿図２は錦山山頂から遺跡を通って山口谷川に至る地形断面図である。



挿図１　鷹ノ巣洞の土地利用図



挿図2　地形断面図

垂直縮尺：水平縮尺＝2：1

第2節　地質

挿図3は宮川と大八賀川に囲まれた三角状の丘陵地帯の地質概念図である。城山、錦山は「錦山熔結凝灰岩」と呼ばれる中生代末の濃飛流紋岩類の一岩体である。風化が著しく東側の中・古生層と断層で接している。山口谷川が中・古生層と流紋岩の境いとなっている。鮮新世末～更新世にかけてこの地域を覆った「丹生川火砕流」が、錦山を取り巻くように点々と分布し、さらに、南側の分水嶺まで丘陵地帯に広がっている。

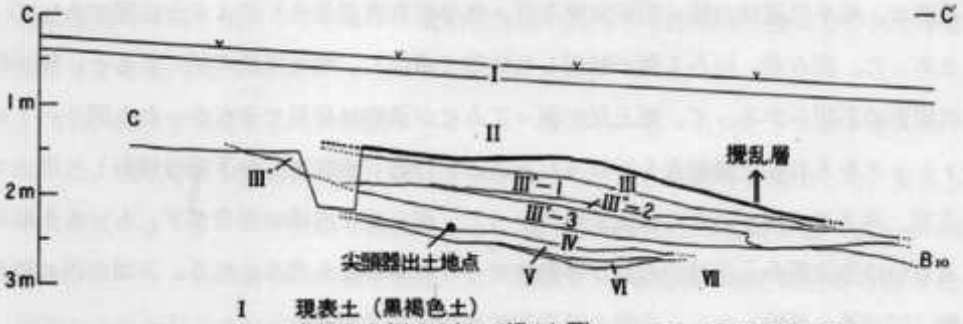
挿図3　高山盆地東部の地質説明図（五万分の一 高山地質図幅による）

挿図4は遺跡周辺の地質略図である。江名子小学校東側の保木の高台は、丹生川火砕流以降の江名子礫層で白い粘土層を縞状に挟んでいる。A地点の東側尾根には東方向から噴流してきた丹生川火砕流が直接リュウモン岩を覆っており、今回の工事で不整合面が確認された。

A地点は丹生川火砕流の風化土を主体とし、B地点ではリュウモン岩の風化帯の上に火山灰層の堆積が見られた。尖頭器の出土したⅣ層は粘土分が多く、とくに火山ガラスの含有が顕著で、自形の紫蘇輝石、角閃石、磁鉄鉱、高温石英、石英、長石、軽石粒が含まれており、降下性の火山灰層である。火山ガラスと含有鉱物から恰良テフラに類似している。縄文土器の包含層のうちⅢ″－1～3も火山灰組成を示すが、炭化物片を多く含み、リュウモン岩の斑晶と思われる石英、長石も認められるため、二次堆積物と思われる。（挿図5参照）

註 1　〈参考文献〉　山田直利ほか『高山図幅』昭和60年　通産省工業技術院

挿図4　遺跡付近の地質略図



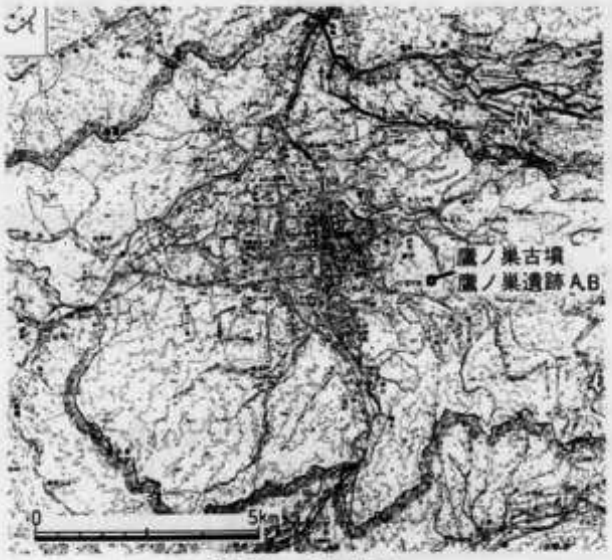
I　現表土（黒褐色土）
II　黄褐色土（地山を削って埋めた層）
III　茶褐色土
III″－1　茶褐色土（炭少し、サラサラ）
III″－2　黒茶褐色土（炭多し）
III″－3　茶褐色土（炭少し、粘質）
IV　明茶褐色粘質土
V　暗茶褐色土
VI　黒茶褐色土
VII　地　山（黄褐色土）
B10　黒色土

挿図5　遺物包含層断面図

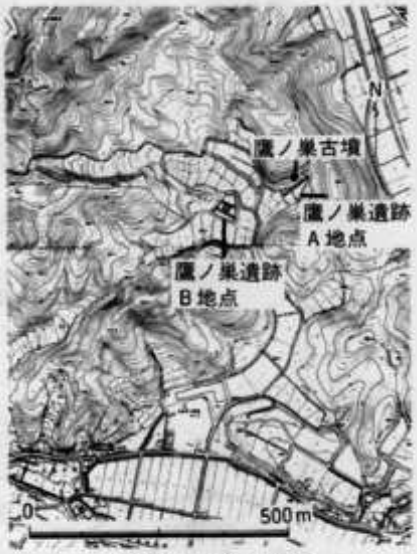
第3章　遺　構

第1節　位置　（挿図6・7、図版1）

本遺跡は高山市街地の東南約2kmに位置する。宮川に合流する江名子川を溯って荏野神社を通過すると江名子町の扇状地形の緩やかな傾斜の平地が展開する。更に700m程溯ると右岸に江名子小学校があり、その東脇の道路を650m北方向へ進むと谷合いのわずかに開けた地形がある。ここに鷹ノ巣古墳、鷹ノ巣遺跡が位置する（挿図7）。鷹ノ巣遺跡A地点は周知の遺跡で、B地点は数年前に岩花秀明氏が特殊スリ石及び異形部分磨製石器（註1）を発見したことにより認識された遺跡である。



挿図6　位置図1



挿図7　位置図2

第2節　鷹ノ巣古墳　（図版15）

同遺跡は、岐阜県遺跡台帳（昭和51年3月・岐阜県教育委員会）によると山麓にあって一部滅失とあった。調査前、巨石2個が傾斜した状態で遺存し、地元住民の話によると、数10年前には鳥居形の石組みがあって、地元民が掘ってみたが遺物は発見できなかったと聞く。1m四方のトレンチを入れて土層調査を行なったところ、巨石（流紋岩）の下層は傾斜した地山であり、玄室、羨道等の掘り込みは検出し得なかった。現在地に古墳は存在せず、もっと上部の斜面、あるいは他位置から古墳の石材が移動させられたものとも考えられる。古墳の西に隣接する桑畑（2727番・墓地）から、少量の須恵器片が出土している。

第3節　鷹ノ巣遺跡A地点　（挿図8、図版16）

同遺跡は『飛騨石器時代遺蹟地名表』（昭和10年3月・飛騨考古土俗学会編）に「鷹ノ巣」

とあり、出土遺物に土器、石鏃、石匙とある。昭和51年岐阜県遺跡台帳に記載されている遺跡該当地は挿図7に示す位置であったので、この区域に東西一直線のトレンチを入れて調査した。その結果、須恵器片、無文縄文土器片が表土中から少量検出されたのみで、遺構は確認されなかった。

桑畑には牛馬の死体を埋めたことがあると聞く。桑畑以前は墓地で、その東に隣接して火葬地があったことが明治21年作製字絵図によって確かめられた（挿図8）。又、墓地の西側は地目が水田になっており、明治初期には既に水田化されていたことがわかる。

挿図8　鷹ノ巣・字絵図

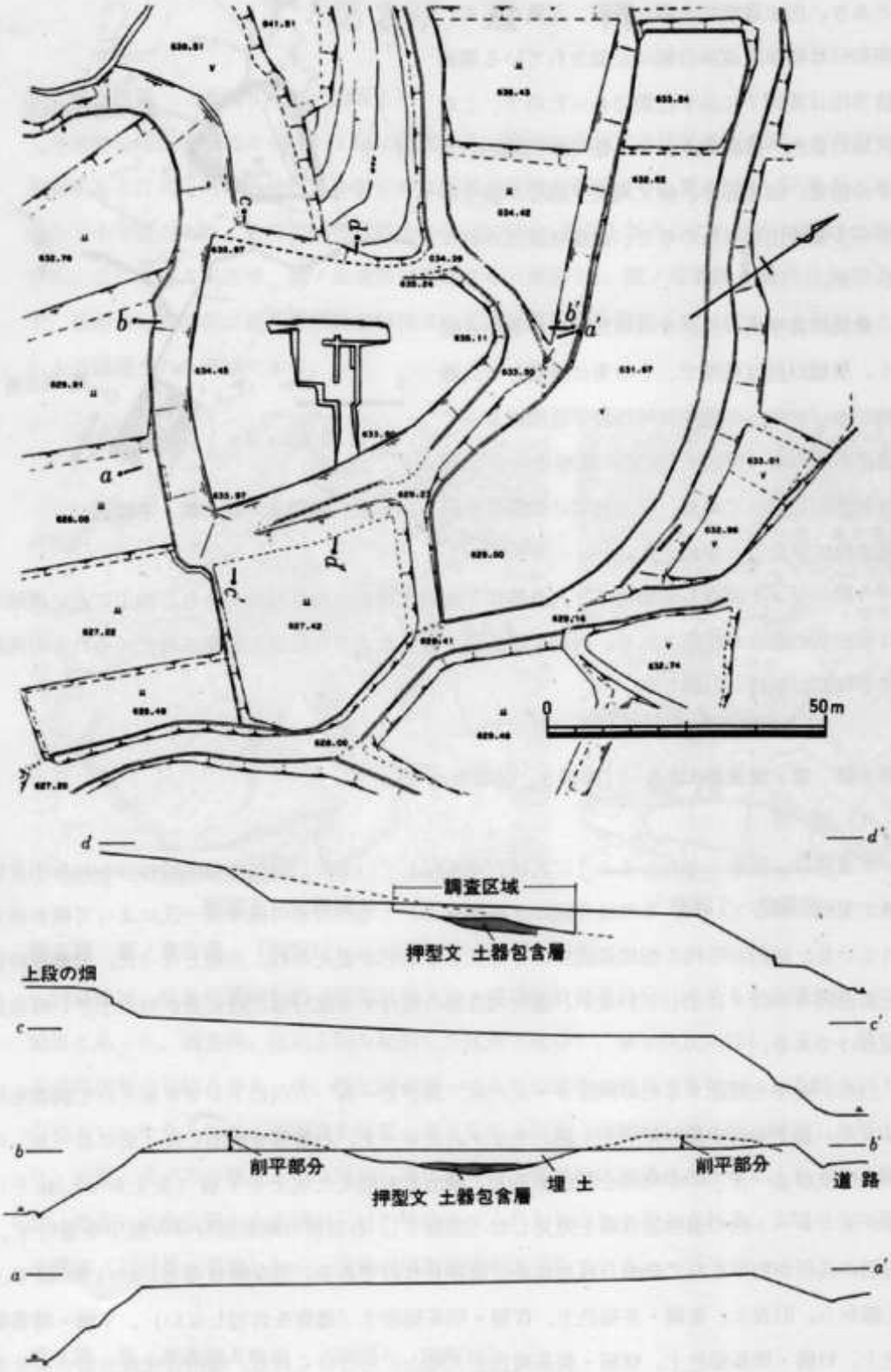
今回トレンチ調査した桑畑は、人為的に1m以上埋められた痕跡があり、地山に近い深層には水田状の断面が観察される。西端に堰を設けていたような痕跡が観察された。これらの所属する時期は明確にし得ない。

第4節　鷹ノ巣遺跡B地点　（挿図9、図版1～8）

a）層　序

本遺跡は、図版1でわかるように舌状台地をなしているが、原地形は二股に分かれた小さい峰が東南に伸びていた。それは今回の土層調査と、土地所有者の保木泉一氏によって確かめられている。昭和40年代の畑地造成によって大きく地形が変えられ、台地となった。旧地形の復元断面図を挿図9に示しているが、遺物包含層の残存する部分は二股に分かれた小さい峰の谷間だけである。

当初、層序を確認するため挿図9・c－c′及びb－b′方向にトレンチを入れて調査を行なった。表土中に少量の押型文土器、チップ、フレーク、石錐等を検出した。更にb－b′の中央部及びd－d′の中央部を精査すると、地山とも思えた埋土の下層（表土から1.3m下）にチョコレート色の遺物包含層を発見した（図版6）。谷間状の地形部分のみ削平を受けず、周囲の高所が削平されて埋められたために遺存したのである。包含層は厚さ1.3～1.4m程で、上層から、旧表土、Ⅲ層・茶褐色土、Ⅳ層・明茶褐色土（遺物を含包しない）、Ⅴ層・暗茶褐色土、Ⅵ層・黒茶褐色土、Ⅶ層・黄茶褐色土（地山）に分けられる。地山は流紋岩類の風化帯である。谷間の地形であるため、流れ込みの埋土が厚いと考えられる。



挿図9　鷹ノ巣遺跡B地点土層断面図

b）第１号土壙・ＳＫ１（挿図10、図版７－１）

挿図10に位置を示しているが、調査区北部に長径68cm、深さ23cmの土壙が１基検出された。遺物は、チャート製円形削器１、黒曜石製ユーズド・フレーク１、下呂石チップ１、チャートフレーク１、山形押型文土器片少量である。土壙の性格は不明であるが、これより東南の下方は谷状に降っているところから、遺跡の中心地は本土壙より上部（西側）にあったのだろう。

c）各層　遺物の出土状況（挿図10・11、図版８）

表土中から押型文土器、特殊スリ石などが発見されている。この層は旧地形の表土が客土され、地山を削平整地後平均的に押しならされたものである。

Ⅲ層は全体的に赤みがかったチョコレート色の褐色土を基本としており、炭の量、粘質具合によってⅢ、Ⅲ′、Ⅲ″、Ⅲ″－１、Ⅲ″－２、Ⅲ″－３に分けた。Ⅲ、Ⅲ′層をⅢ層上部とし、Ⅲ″、Ⅲ″－１～３をⅢ層下部とした。

Ⅲ層上部からは土器84点が出土し、その内押型文土器が23点、繊維入土器が23点含まれる。前期、中期の土器が含まれ、流れ込んだ層と考えざるを得ない。

Ⅲ層下部からは土器136点が出土し、その内押型文土器が49点ある。縄文時代中期の土器が混在し、Ⅲ層上部と同様流れ込んだ層と考えざるを得ない。

Ⅳ層は明るい褐色の粘質土で、遺物は尖頭器一点のみである（図版５）。

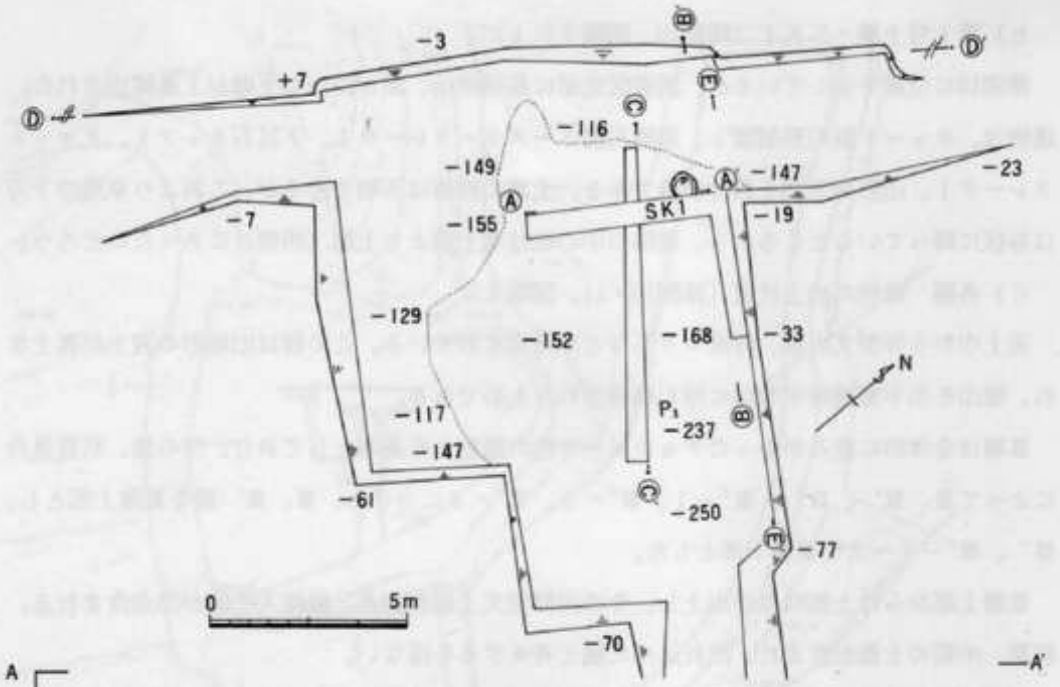
Ｐ1からは山形押型文土器が１点確認された（図版４－２）。

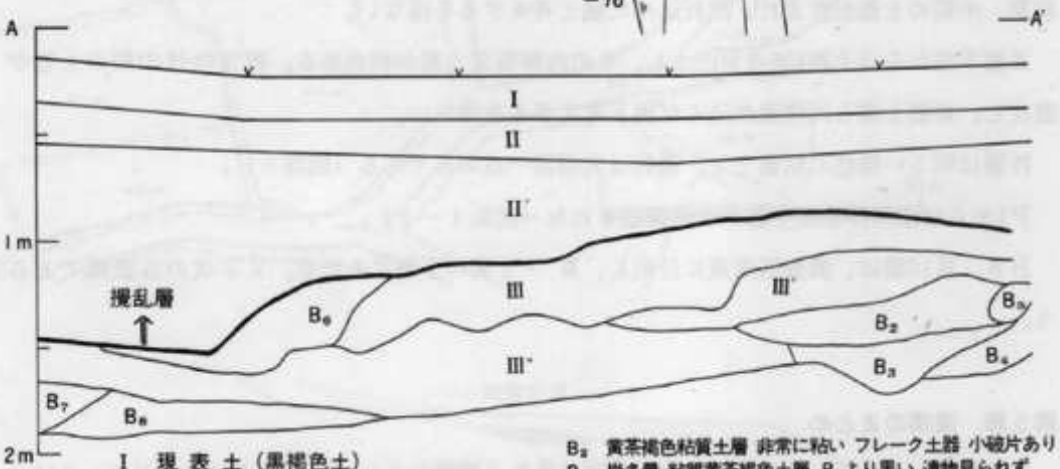
Ｂ８、Ｂ10層は、調査区南東に分布し、Ⅲ″－２層の下層にあたる。Ｖ字状の谷底部であろう。

第５節　遺構のまとめ

Ⅲ層はチョコレート色をした遺物包含層であり、明暗色をわずかに変えてサンドイッチ状に堆積する。全体的に粘質土で、遺物は押型文土器からオセンベ土器、繊維入り、中期土器など各時期にまたがる流れ込みの包含層である。調査区西北部の第１号土壙は早期の遺構である。Ｐ1は山形押型文土器が１点検出されたが、性格は不明である。

註　1　　高山市教育委員会　『飛騨の考古学遺物集成Ⅰ』1985、13頁



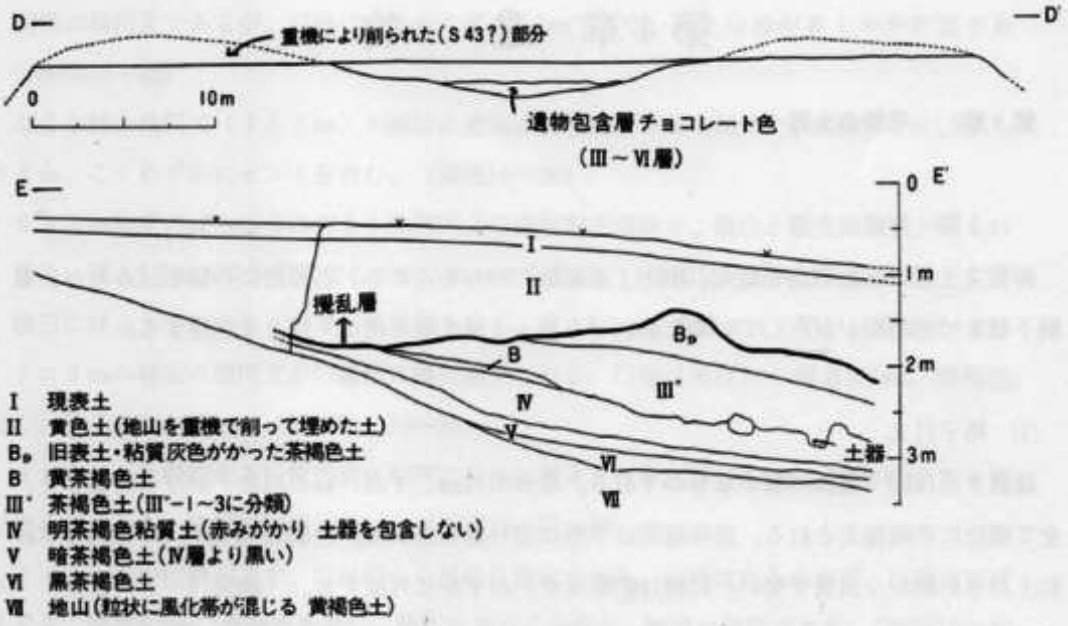


I　現 表 土（黒褐色土）
II　粘質黄色土
II'　黄 色 土（地山削平埋土）
III　黒茶褐色土（炭多し、遺物多し）
III'　茶褐色土（炭わずか、土器包含）
III"　茶褐色土（III'より赤みがかる。遺物少）

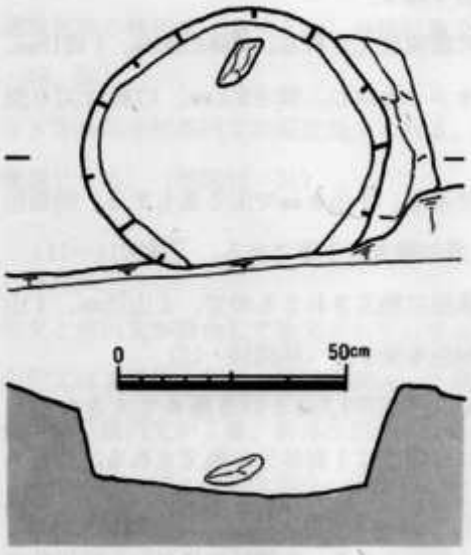
B_2　黄茶褐色粘質土層 非常に粘い フレーク土器 小破片あり
B_3　炭多量 粘質黄茶褐色土層 B_2より黒い 遺物見られず
B_4　B_3より少し黄色っぽい炭混り黄茶褐色土層 粘質
B_5　B_2とよく似た粘質土 ブロック状に混入する
B_6　黒色土に茶褐色が縞状に混じる
B_7　B_6よりもさらに黒い黒褐色土層 遺物なし
B_8　黒茶褐色 粘質土 遺物なし

I　現表土・黒褐色土
II　粘質黄色土
II'　黄 色 土
II"　茶色土と黄色土が縞状に堆積
II'''　粘質黄色土
IIIa　明茶褐色土
III　（III'～III"）炭わずかに混入 茶褐色土
V　地山黄褐色（少しサラサラ）
B_1　黒茶褐色 粘質ブロック

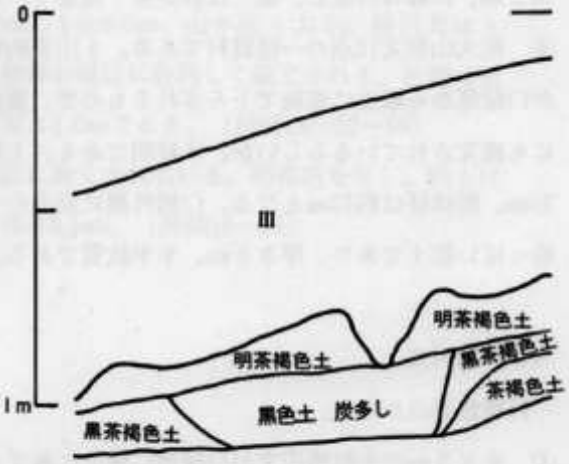
挿図10　鷹ノ巣遺跡B地点遺構図



挿図11　断面図D-D′　E-E′



挿図12　第１号土壙（ＳＫ１）遺構図



挿図13　P_1（ピット）断面図

第4章　遺　物

第1節　早期の土器

1類　押型文土器

押型文土器は総数67点を数え、出土土器総数の29%を占める。各層毎に分類を試みたが、Ⅲ層下部まで各時期が混在しているため、ピット・土壙を除く他は一括して記述する。

(1)　格子目文

総数9点は同一個体に属するものである。原体巾22㎜、1周17㎜の斜め下がり6目格子で、全て横位に密接施文される。原体端部は平坦に切り落とされる。色調は黄褐色で、厚さ6.6㎜胎土はきめ細かく良質で堅い。口唇は肥厚せず、わずかに外反する。（挿図14―1～9）

(2)山形文

総数15点で、4種類がみられる。（楕円文との複合を除く）

①　2単位5条のやや太い山形文で口縁部から横位に密接施文される。原体巾20㎜、1周18㎜、1山9㎜で明褐色を呈し、細かい砂とごくわずかにセンイを含む。厚さ9.2㎜、口唇は尖り気味に直上する。（挿図14―10）

②　2単位3条と思われる太い山形文で、横位密施である。1山8㎜で尖る条もある。明褐色を呈し、厚さ5.8㎜、胎土は精製されて良質であり、裏の磨きは丁寧である。（挿図14―11）

③　粗大な山形文が4条ないし5条、口縁に沿って横位に施文されるもので、1山15㎜、1山巾2㎜、口縁は外反し、胎土は砂が多く粗質で、黒褐色を呈す。（挿図14―12）

④　粗大山形文12点の一括資料である。1山長約40㎜、凸部巾3.3㎜という極めて大きな山形が口縁部から縦位に密施で下ろされるもので、裏面には横位に1原体分が施文される。口唇上にも施文されているらしいが、不鮮明である。1単位原体で7条ないし8条あり、原体巾は約30㎜、原体径は約12㎜となる。口唇外側に刻みのつく個体もある。色調は褐色ないし暗褐色で砂っぽい胎土であり、厚さ8㎜、やや軟質である。（挿図14―13～23）

（3）楕円文

11種類30点がある。

①　6×3㎜の小粒楕円文が口縁部に横位に施文される。口唇はやや角ばり、厚さ5.4㎜、細砂をふくみ、焼成は普通である。（挿図15―24）

② 同様の楕円文であるが、口唇はやや丸く厚さ7.5㎜であり、胎土は砂が多くやや軟質である。（挿図15—25）

③ ごく小粒の楕円文（3×2㎜）が縦位に密施される胴下半部の個体で、明褐色を呈し堅い。厚さ6㎜、ごくわずかにセンイを含む。（挿図15—26）

④ 5×3㎜程度のばらつきのある小粒楕円文の密施胴部個体で、横位と斜位の施文がみられる。褐色、厚さ7.7㎜、やや粗質でわずかにセンイを含む。（挿図15—27～31）

⑤ 楕円にばらつきのあるもので、黒褐色を呈し、厚さ7.2㎜、焼成は良く堅い。(挿図15－32)

⑥ 7×3㎜の横長の楕円文が口縁部に横位施文される。口唇は角ばり、厚さ6.7㎜、暗褐色を呈し、胎土はやや粗い。（挿図15—33～36）

⑦ 8×5㎜の比較的大きい楕円文が胴部に斜位に施文される。厚さ6.6㎜、細かいガラス質の鉱物を多く含み、良質で焼成は良い。（挿図15—37～39）

⑧ 7×5㎜の中粒楕円文で、口縁部から斜位に施文される。口唇は丸みをおび、口縁はほぼ直上する。厚さ8.2㎜、赤褐色を呈し、胎土にセンイを含む。焼成は良好である。（挿図15—40～47）

⑨ 中粒の楕円文が浅く横位に施文される。赤褐色で厚さ5.5㎜、焼成普通。（挿図16—48）

⑩ 連珠気味の楕円文（7×5㎜）が横位施文される。厚さ6.5㎜、赤褐色で焼成普通。（挿図16—49、50）

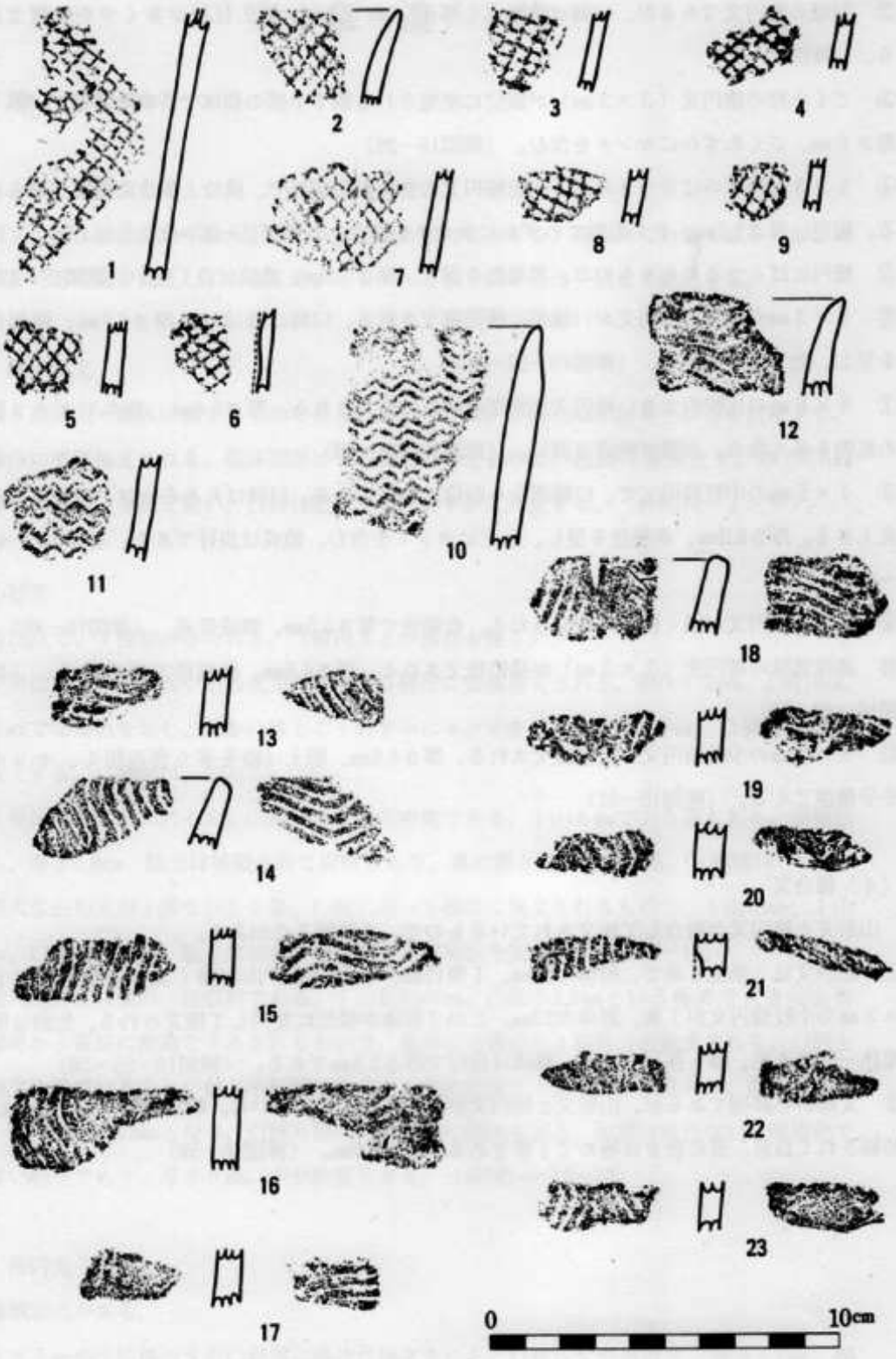
⑪ 5×3㎜の小粒楕円文が縦位施文される。厚さ4.8㎜、胎土は砂を多く含み粗く、センイを少量混じえる。（挿図16—51）

（4）複合文

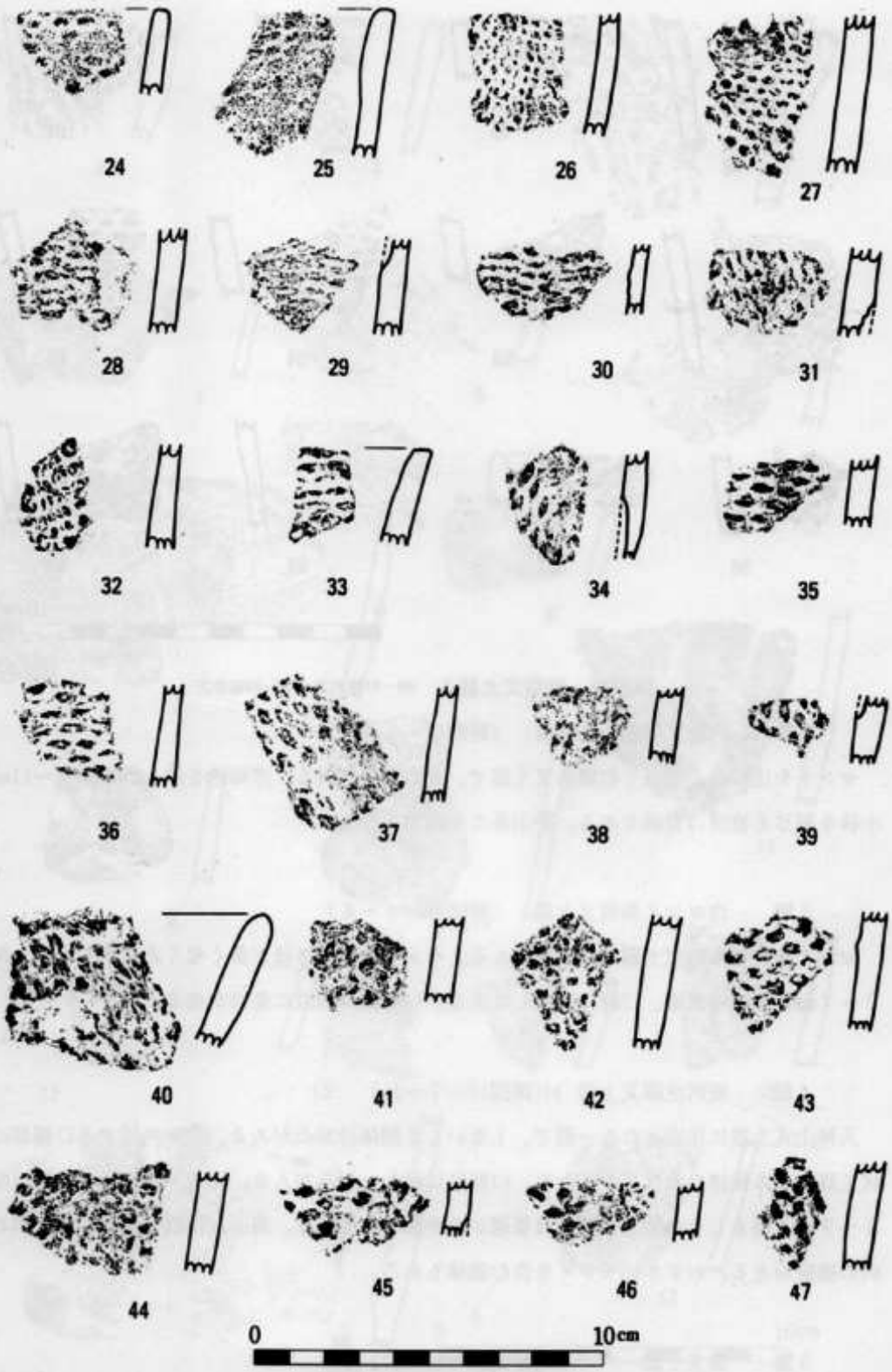
山形文と楕円文が複合して施文されているもので、2種類7点がある。

① 山形文は2単位4条で、原体巾20㎜、1周12㎜、1山6.5㎜、山が細く尖る。楕円文は5×3㎜の小粒楕円文が7条、原体巾22㎜。この2原体が横位に並列して施文される。色調は明褐色一部暗灰色、砂・長石を含み、焼成は良好で厚さ5.6㎜である。（挿図16—52～58）

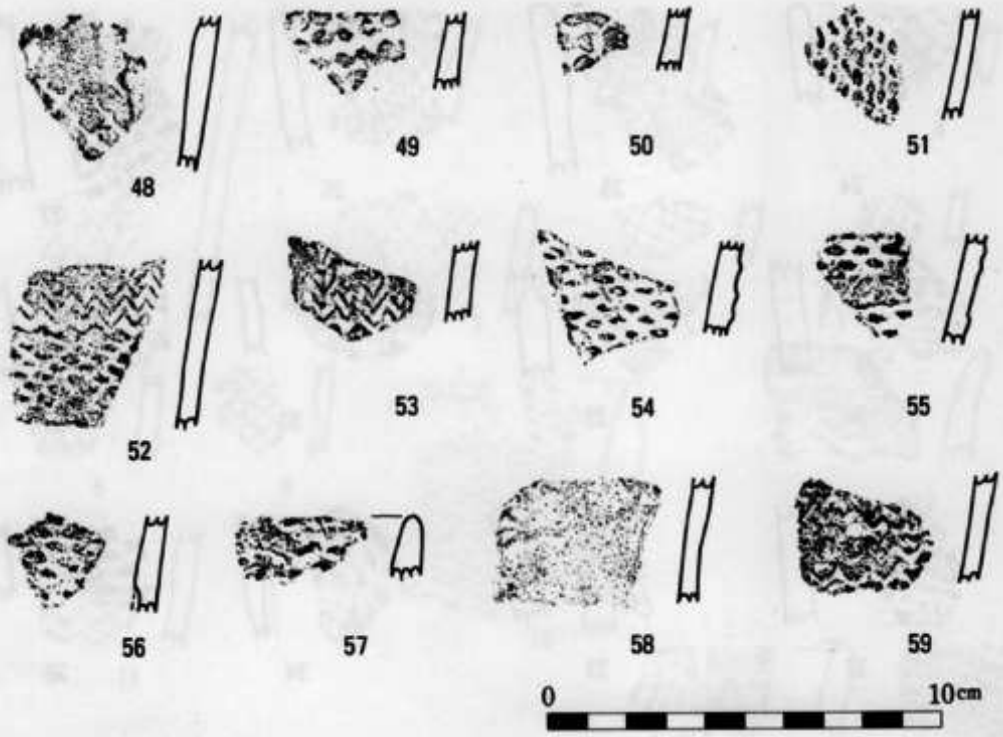
② 文様が不鮮明であるが、山形文と楕円文が横位に施文されている。明褐色を呈し、胎土は精製されて良質、裏の磨きは極めて丁寧である。厚さ5.5㎜。（挿図16—59）



挿図14　押型文土器１　１～９格子目文　10～23山形文



挿図15　押型文土器 2　24～47横円文



挿図16　押型文土器３　48～51楕円文　52～59複合文

２類　　含センイ撚糸文土器　（挿図17－１～３）

センイを比較的多くふくむ撚糸文土器で、３点がみられる。赤褐色を呈し、厚さ７～11㎜、小砂を混じえ焼成は普通である。茅山系の土器であろう。

３類　　含センイ条痕文土器　（挿図17－４～６）

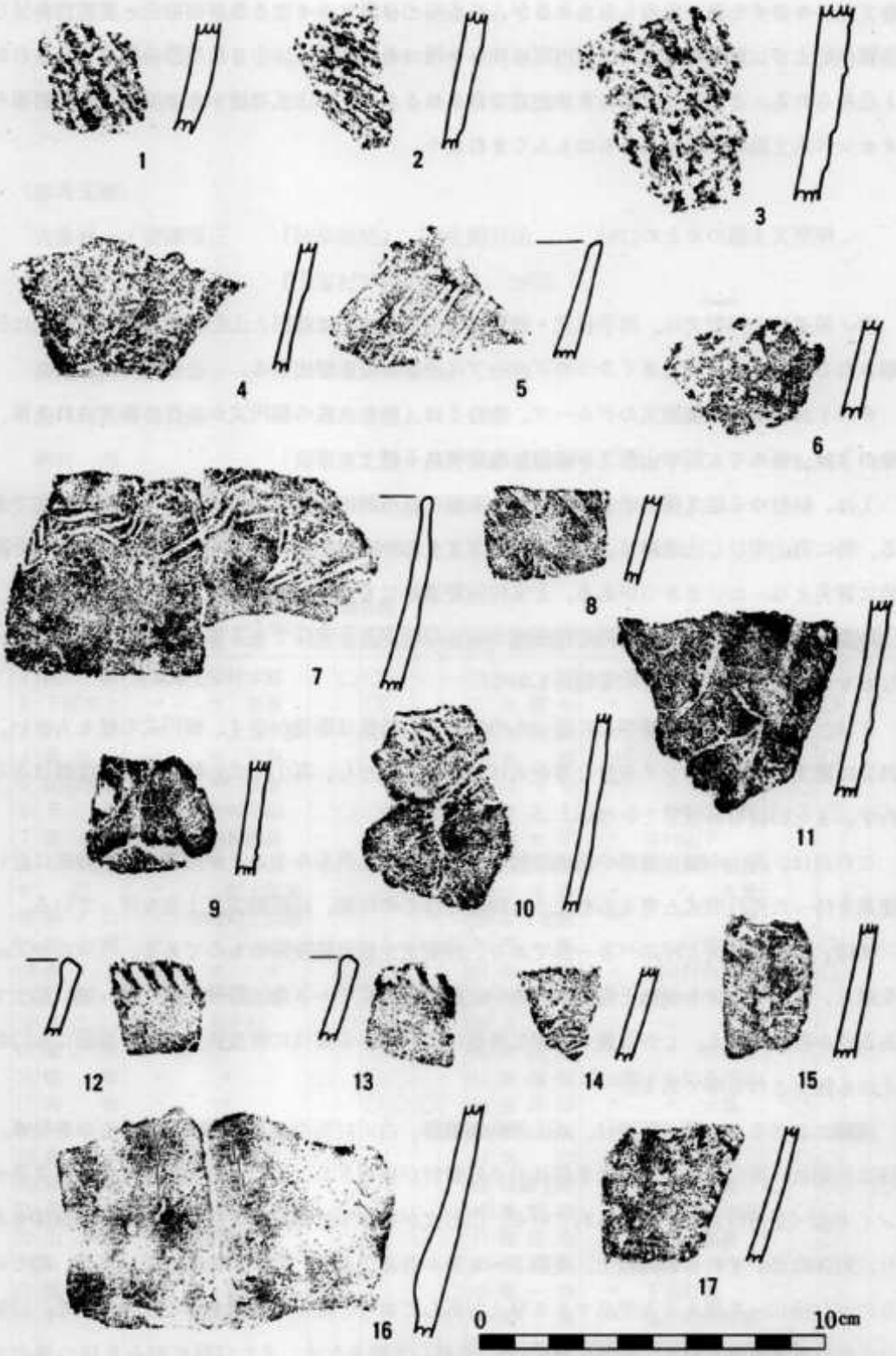
センイを含む条痕文土器で６点を数える。センイの量はさほど多くなく赤褐色を呈し、厚さ６～７㎜、焼成は普通、口縁は直上して尖る。口縁部に斜位に条痕が走る。

４類　　波状沈線文土器　（挿図17－７～11）

天神山式土器に比定される一群で、１ないし２個体分20点がある。やや内傾する口縁部に櫛状工具による稚拙な波状文が描かれ、口唇には細かい刻みが入る。褐色・暗褐色を呈し、厚さ５～７㎜、砂まじりの胎土で焼成は普通かやや悪い方である。裏面に指痕を残し、また斜め方向の擦痕が走る。わずかにセンイを含む個体もある。

５類　　無文土器　　（挿図17－12～17）

無文土器は26点を教えるが、いずれも厚さ４～６㎜の薄手で内外面に指頭圧痕を残し、ごく



挿図17　早期の土器　2類 1～3　3類 4～6　4類 7～11　5類 12～17

わずかにセンイを混じえるものもあるが、ほとんどは無センイである。明褐色・黄褐色を呈し良質の胎土で、焼成も良い。口唇内部に刻みを持つものが2点、小さな爪形の列をもつものが1点みられる。これらは4類の天神山式に含まれるもの、石山式に近いものの外、前期初頭のオセンベ系土器の系統に入るものもふくまれよう。

押型文土器のまとめ

鷹ノ巣遺跡の押型文は、格子目文・楕円文・山形文そして楕円と山形の複合文の4種類に分類されるが、これらは大きく3つのグループに分けることが出来る。

その1は、横位密接施文のグループ、その2は、やや大粒の楕円文が斜位に施文される種、その3は、極めて大形の山形文が縦位に施文される種である。

1は、いわゆる細久保タイプと呼ばれるもので、飛騨地方では最もポピュラーな押型文である。特に高山市ひじ山遺跡は、この種の押型文を1,000点以上出土し、赤木清らによって全国的に著名となったいきさつがある。上宝村向野遺跡にも良好な資料がある。

特徴として器壁が薄く、楕円の粒が細かい、口縁が直上気味である等の点があげられよう。なおセンイを微量ふくんでくる個体もある。

2は、高山寺タイプの押型文に近いものである。特徴は器壁が厚く、楕円文の粒も大きい、斜位に施文される、センイを含む等があげられる。ただし、高山寺式に特有の裏面沈線はみられず、また口縁も外反していない。

この点は、高山市糠塚遺跡や向畑遺跡にも共通の出土例をみることが出来、高山寺式に近い要素を持った先行型式と考えられよう。向畑ではこの時期、貝殻刺突文土器を伴っている。

3は、粗大山形文と呼ぶべき一群であり、押型文土器最終段階のものである。原体巾が30㎜を越し、1山の長さも40㎜と極端に大きい。条数も多く7～8条、器壁が厚く砂っぽい胎土である点が特徴である。しかし最も重要な特徴は、口縁から縦位に密接施文され、裏面にも口唇上にも施文される事である。

飛騨におけるこの種の類例は、高山市向畑遺跡、白川村島巾通り遺跡に良好なものを見る。特に向畑は、高山寺式の上層に半個体分の好資料が検出され、この土器に重なって条痕文系センイ土器（子母口式か）も得られている。山形文が樹形平行四辺形文に変化している個体もあり、原体巾はいずれも40㎜以上、条数7～8条が普通である。原体が太く大きい事は、器そのものが口径40㎝を越える大型品である事と対応しており、従って器壁も厚くなっている。口縁の外反はあまり強くなく、底部は角度115°の鈍い尖底をなす。また口唇に刻みを持つ場合が多いことも特徴的といえよう。

神村透氏は、この種の土器を相木式との関連でみておられる。向畑では、突帯や竹管文を伴う山形文を伴出しており、相木式とのかかわりは大きいと思われる。いずれにせよ、最終末期の押型文の様相を示す資料として、これらの一群を認識しておく必要があろう。

〔参考文献〕

大参義一・安達厚三　『岐阜県史』　通史編原始　1972

大江傘・下形武　『上宝村の先史時代』　1958

高山市教育委員会　『糠塚遺跡』　1982

高山市教育委員会　『向畑遺跡の遺物』　1983

白川村教育委員会　『巾通り遺跡』　1983

神村　透　「押型文土器―長野県の遺跡から」考古学ジャーナル№267　1986

関野　哲夫　「高山寺式土器の編年」『先史考古学研究』1　1988

帝塚山考古学研究所　『縄文早期を考える』　1988

飛騨地方の押型文土器出土遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	大立	樋	細	高	相	押	番号	遺跡名	所在地	大立	樋	細	高	相	押
1	向　野	吉城郡上宝村本郷		○	○				26	ヤツノ下	大野郡白川村椿原						○
2	下尾の上	〃　〃　宮原			○				27	巾通り	〃　〃　島		○	○		○	
3	大　首	〃　〃　上地ケ根			○				28	上岩野	〃　清見村牧ケ洞			○			
4	宮の上	〃　〃　吉野						○	29	寺　洞	〃　〃　〃			○			
5	杖石岩陰	〃　〃　長倉						○	30	はつや	〃　〃　〃		○				
6	下　田	〃　河合村下田		○	○				31	堂之上	〃　久々野町久々野	○	○	○		○	
7	宮ノ前	〃　宮川村西忍			○				32	亀ケ平	〃　宮村山下						○
8	ニコイ岩陰	〃　〃　菅沼			○				33	根方岩陰	〃　丹生川村根方				○		
9	沢	〃　古川町上気多		○					34	つぼの	〃　〃　大萱				○		
10	洞ノ口	〃　国府町上広瀬			○				35	ごうど野	〃　〃　上野						○
11	田ノ洞	〃　〃　〃						○	36	西　田	〃　〃　五味原			○			
12	宮ノ下	〃　〃　〃		○	○				37	中　道	〃　朝日村西洞		○	○			
13	殿	〃　〃　宮地						○	38	とぐち	〃　高根村中洞		○				
14	ひじ山	高山市江名子町		○	○				39	上　野	〃　〃　〃						○
15	鷹ノ巣	〃　〃			○	○	○		40	槍柄原	〃　〃　日和田			○			
16	糠　塚	〃　〃	○		○	○			41	赤沼田	益田郡小坂町赤沼田		○				
17	向　畑	〃　〃			○	○	○		42	岩井田	〃　〃　大島		○				
18	白　元	〃　漆垣内町						○	43	橋　場	〃　〃　〃	○	○	○	○		
19	善応寺	〃　西ノ一色町		○					44	水　口	〃　〃　小坂		○	○			
20	堂　幅	〃　石浦町			○				45	長瀬上野	〃　〃　長瀬	○		○		○	
21	荒神洞	〃　下切町		○	○				46	裏垣内	〃　〃　赤沼田		○	○			
22	山ノ下	〃　中切町						○	47	福応寺	〃　〃　落合			○			
23	日影平	〃　岩井町			○				48	南垣内	〃　〃　〃	○	○	○	○		
24	狐　洞	〃　下ノ切町						○	49	峯一合	〃　下呂町森	○		○			
25	上　畑	〃　松之木町						○	50	細　越	〃　金山町卯野原						○
									51	森ノ下	大野郡朝日村甲	○	○	○	○	○	

〔資料〕神村透『開田高原大原遺跡』（1986）に加筆・修正

（大立）大川・立野、（樋）樋沢、（細）細久保、（高）高山寺、（相）相木、（押）押型文

第2節　中期の土器

鷹ノ巣遺跡では、早期末に続く前期の土器はみあたらず、中期初頭の土器がいくつかみられる。

1類　竹管文土器（挿図18—1～9）

半截竹管による半隆起線文・爪形文・沈線文が描かれる土器で、黒褐色のものが1点あるほかは、10点全て明褐色である。1は口唇上と隆帯の上にも縄文がつく。2は口唇が丸みをおび、3は口唇部に爪形の列がみられる。7は胴部の撚糸文である。厚さ7～8㎜で焼成は普通。北陸系新保式に比定される土器群である。

この他、胎土に金雲母をふくむ竹管刺突文土器が2点あり、これは信州系とみられる。厚さ7㎜、赤褐色である。（挿図18－8、9）

2類　蓮華文土器（挿図18—10、11）

口縁部に蓮華文のつく土器が2点ある。口唇はひさしの様に外に張り出し、口唇端は平坦である。厚さ7～11㎜、褐色、焼成普通、胎土に長石粒をまじえる北陸系の新崎式土器であろう。

3類　隆帯文土器（挿図18—12）

赤褐色を呈する厚さ13㎜のぶ厚い土器で、巾12㎜の太い隆帯が2条巡る、内傾した特殊な器形の土器である。有孔鍔付土器かも知れない。胎土に白色砂をまじえ、焼成良好。

4類　刺突文・撚糸文土器（挿図18—13～18）

地文に細かい撚糸文をもち、その上に沈線による円文や貝頂部による刺突文が施文される一群で、関西系の船元式に類するものである。胎土に砂を混じえてやや粗く、厚さ6～7㎜、明褐色、焼成普通である。

5類　条線文土器（挿図19—19～22）

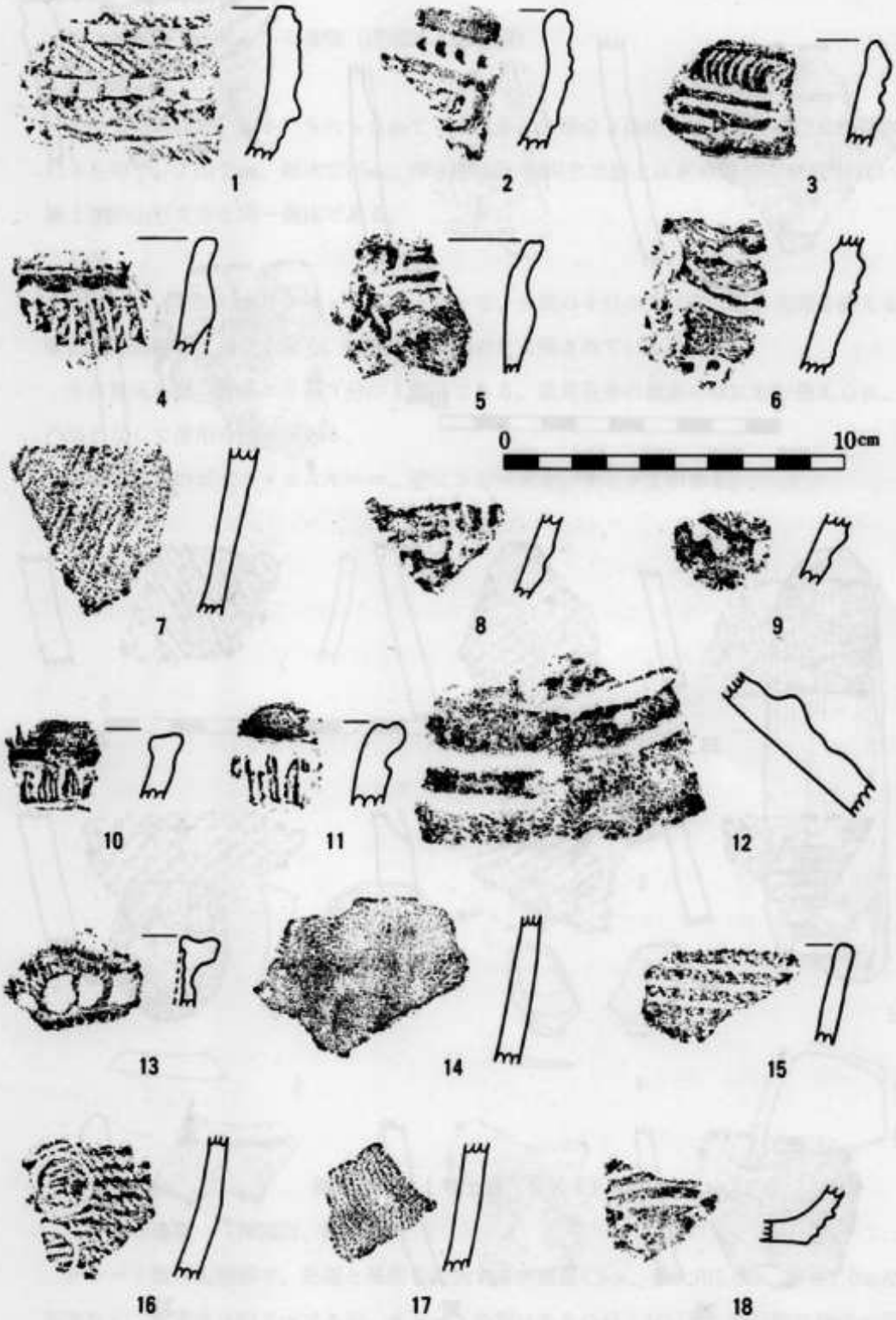
櫛状工具による細い条線が縦位に走る黄褐色の土器で、1個体11点がある。厚さ8㎜、胎土焼成とも良好で極めて堅い。口縁部には1条の隆帯が走る。

6類　縄文土器（挿図19—23～28）

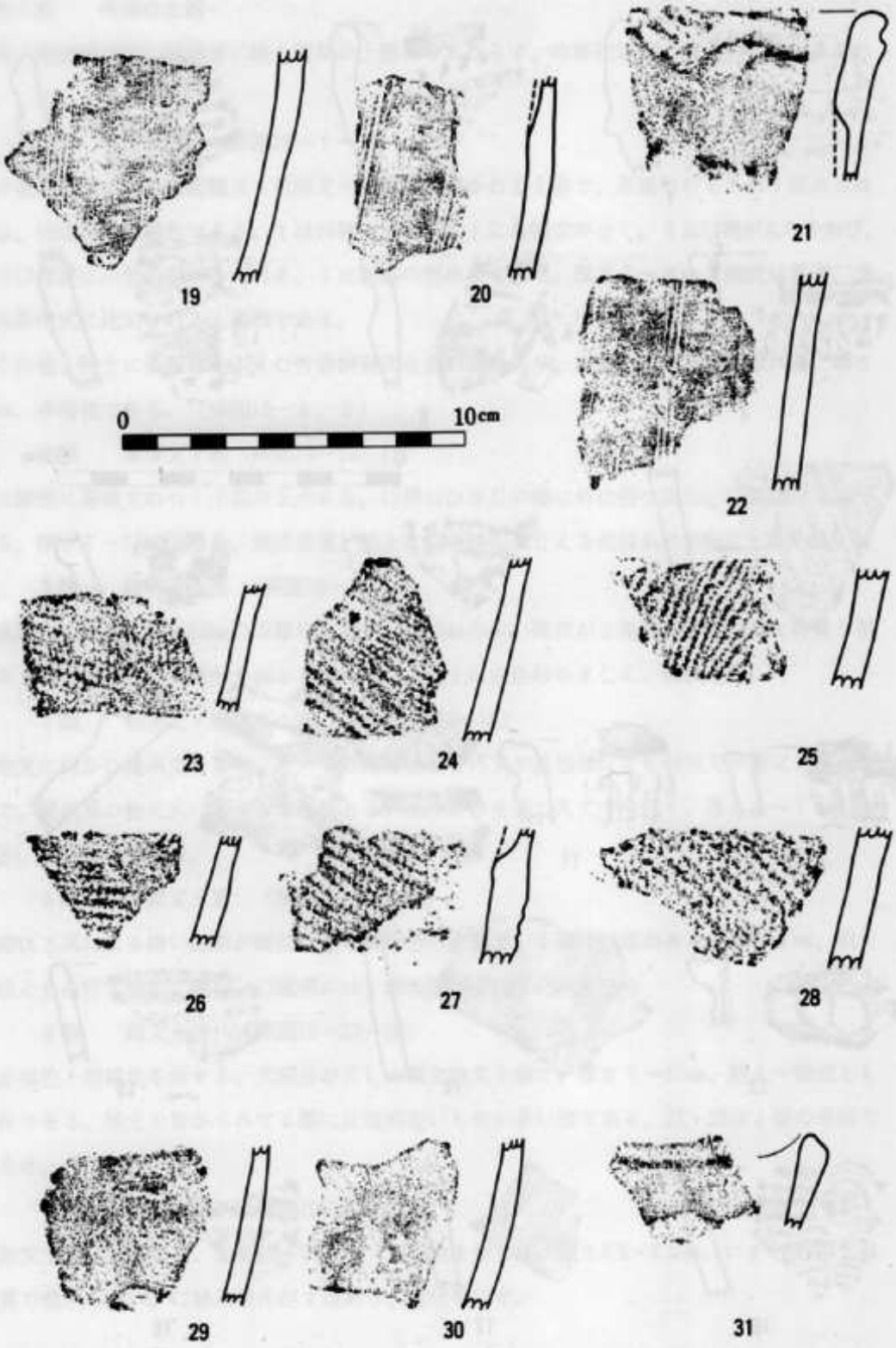
赤褐色・明褐色を呈する。大部分がＲＬの縄文施文土器で、厚さ7～10㎜、胎土・焼成とも良好である。胎土の質からみて3類に比較的近いものが多い様である。27・28は1類の系統であろう。

7類　無文土器（挿図19—29～31）

無文土器は20点あり、赤褐色・明褐色・黄褐色を呈する。厚さ5.5～7.5㎜、いずれも胎土は良質で焼成も良い。口縁部破片が1点あり、波状をなす。



挿図18　中期の土器 1　1類 1～9　2類 10～11　3類 12　4類 13～18



挿図19　中期の土器２　５類 19～22　６類 23～28　７類 29～31

第3節　遺構の遺物

第1号土壙（ＳＫ１）の遺物（挿図20、図版12）

(1)押型文土器

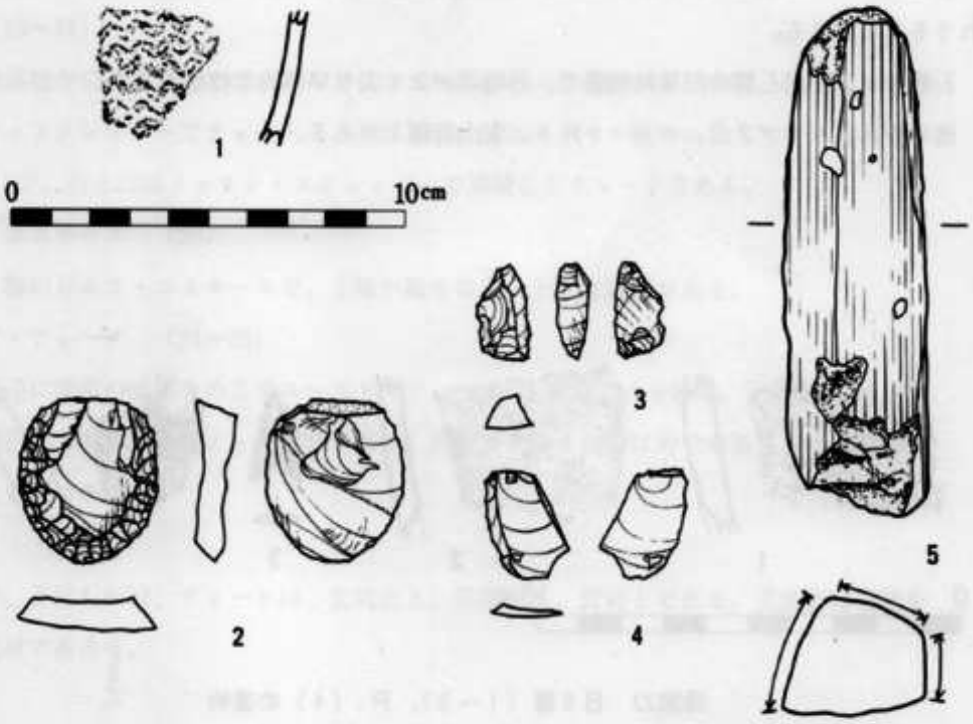
山形文の破片が、細かいものも含めて6点ある。2単位3条の太い山形が横位に密接施文されるもので、1山7㎜、原体巾18㎜、厚さ5.5㎜。明褐色で胎土はきめ細かく焼成も良い。Ⅲ層上部の山形文②と同一個体である。

(2)石器

2はチャート製のラウンド・スクレィパーで、全周の4分の3に60°近い刃部を備える。主要剥離面側は加工は全くなく、打面は自然面のまま残されている。

5は凝灰岩製の特殊スリ石3分の1個体である。定角石斧の側面の様に形が整えられ、やや凸面をなして使用の痕跡がある。

3は黒曜石のピエス・エスキーユ、他にフレーク2、チップ1がある。



挿図20　第1号土壙（ＳＫ１）の遺物

Ⅳ層の遺物　（挿図21、図版12）

チャート製の尖頭器で、先端と基部を欠失するが現長4.5㎝、最大巾2.3㎝、厚さ1.0㎝の木葉形をなし、推定長は約7㎝である。チャートの質はあまり良くないが、部分的に樋状の長い剥離がみられ、押圧テクニックが用いられている。有舌尖頭器段階の所産である可能性も強い。

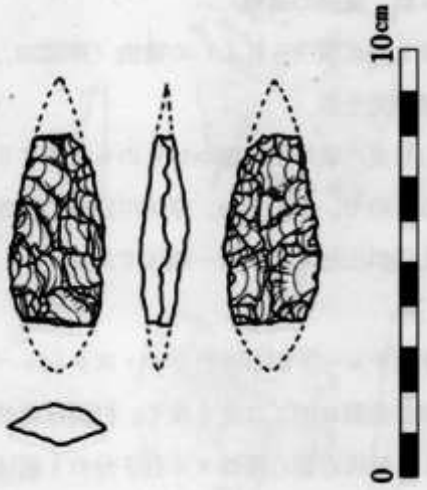
Ｐ₁の遺物　（挿図22－４、図版12）

山形押型文土器が１点ある。条数は不明であるが１山長５㎜の細く尖る山形が２単位で刻まれる。底部に近い個体で、最大厚９㎜、灰褐色を呈し、胎土は良質で焼成も良い。

他に砂岩の自然礫１がある。

Ｂ８層の遺物　（挿図22、図版12）

１はＬＲの縄文のみられるもので灰褐色、厚さ10㎜、胎土に砂や長石粒を多く混じえ、北陸系の中期初頭土器の胎土によく似た様相を示している。

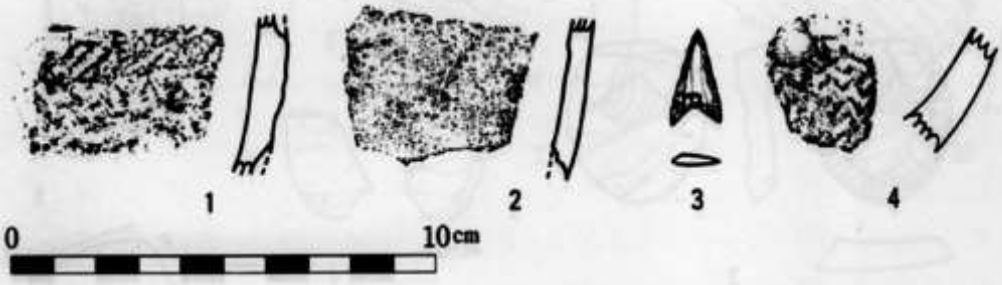


挿図21　Ⅳ層の遺物

２は無文の硬質の土器で、厚さ5.4㎜、黄褐色を呈し、早期天神山式土器（４類）にふくまれうるものである。

石鏃３は、下呂石製の凹基無柄鏃で、各端部がよく尖り早期的な特徴を示す。

他に下呂石チップ２点、チャート片１、安山岩礫１がある。



挿図22　Ｂ８層（１～３）、Ｐ₁（４）の遺物

第4節　石器　（挿図23・24、図版13）

(1)石鏃　（1～11）

12点ある。下呂石8、チャート3、黒曜石1で、形態的には凹基無柄7、三角4、不明1である。長さが1㎝に満たない小形のものが7点を占める。黒曜石の1点は剥片にわずかの加工を加えただけのものである。

(2)石錐　（12、13）

2点がみられる。12はチャート剥片の一部に長さ5㎜の錐部を作出したもので、断面は三角を呈する。13は約2分の1を欠失するが錐部とつまみ部の境がないタイプと思われる。チャート製。

(3)尖頭石器　（14）

黒曜石製の石槍状石器が1点ある。半分を欠失するため未製品かどうかも良くわからないが両面に加工がなされ、先端部を作出する意図がみられる。

(4)削器　（15～22）

各種の削器類が12点ある。15は小形のラウンド・スクレィパーでチャート製。16、17、18、19はサイド・スクレィパーでチャート3、下呂石1。20はチャート製のエンド・スクレィパーで刃部角は50°。21と22はノッチド・スクレィパーで黒曜石とチャートである。

(5)ピエス・エスキーユ　（23）

チャート製のピエス・エスキーユで、上部が縁をなし、上下に剥離が走る。

(6)ユーズド・フレーク　（24～26）

剥片の縁辺に使用の痕跡をのこすユーズド・フレークは、総数32点を数え、下呂石24、チャート7、黒曜石1である。24はノッチ気味であり、26はカミソリの様な刃で木製品などの細部加工を行ったものであろう。

(7)フレーク

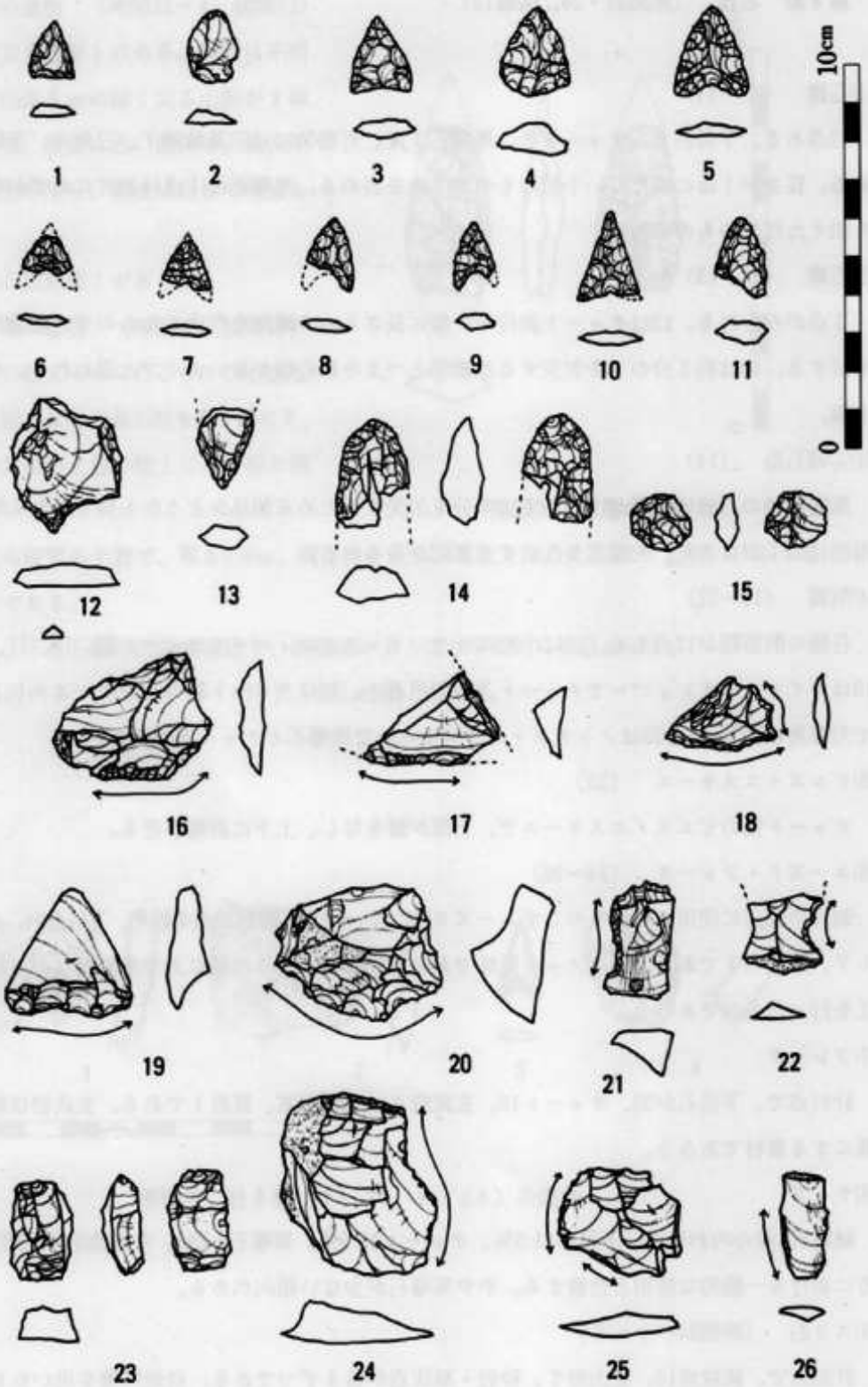
計47点で、下呂石が32、チャート10、玄武岩3、黒曜石1、頁岩1である。玄武岩は器種を異にする素材であろう。

(8)チップ

総数314点の内わけは、下呂石81.5%、チャート15.6%、黒曜石2.2%、その他0.7%で飛騨地方における一般的な様相と合致する。やや黒曜石が少ない傾向がある。

(9)スリ石　（挿図24－1～9）

計32点で、流紋岩16、安山岩7、砂岩・凝灰岩が各4ずつである。自然円礫を用いたものが多く、面取りなど加工の痕跡を残すものは無い。被火熱の痕跡あるものが2点みられる。



挿図23 石　器　1

図　　版

⑽凹石

3点で、砂岩・流紋岩・安山岩各1である。2個の凹みが並ぶものが2点と、1個の凹みのもの1点で、いずれも片面のみにある。

⑾特殊スリ石

自然円礫の長軸の一縁に使用の痕跡を持つもので、動物の皮なめしに用いられたとする見解がある。5点全てが火熱を受けてもろくなっており、石材は流紋岩2、安山岩2、砂岩1である。早期押型文に伴うものであろう。

⑿敲石

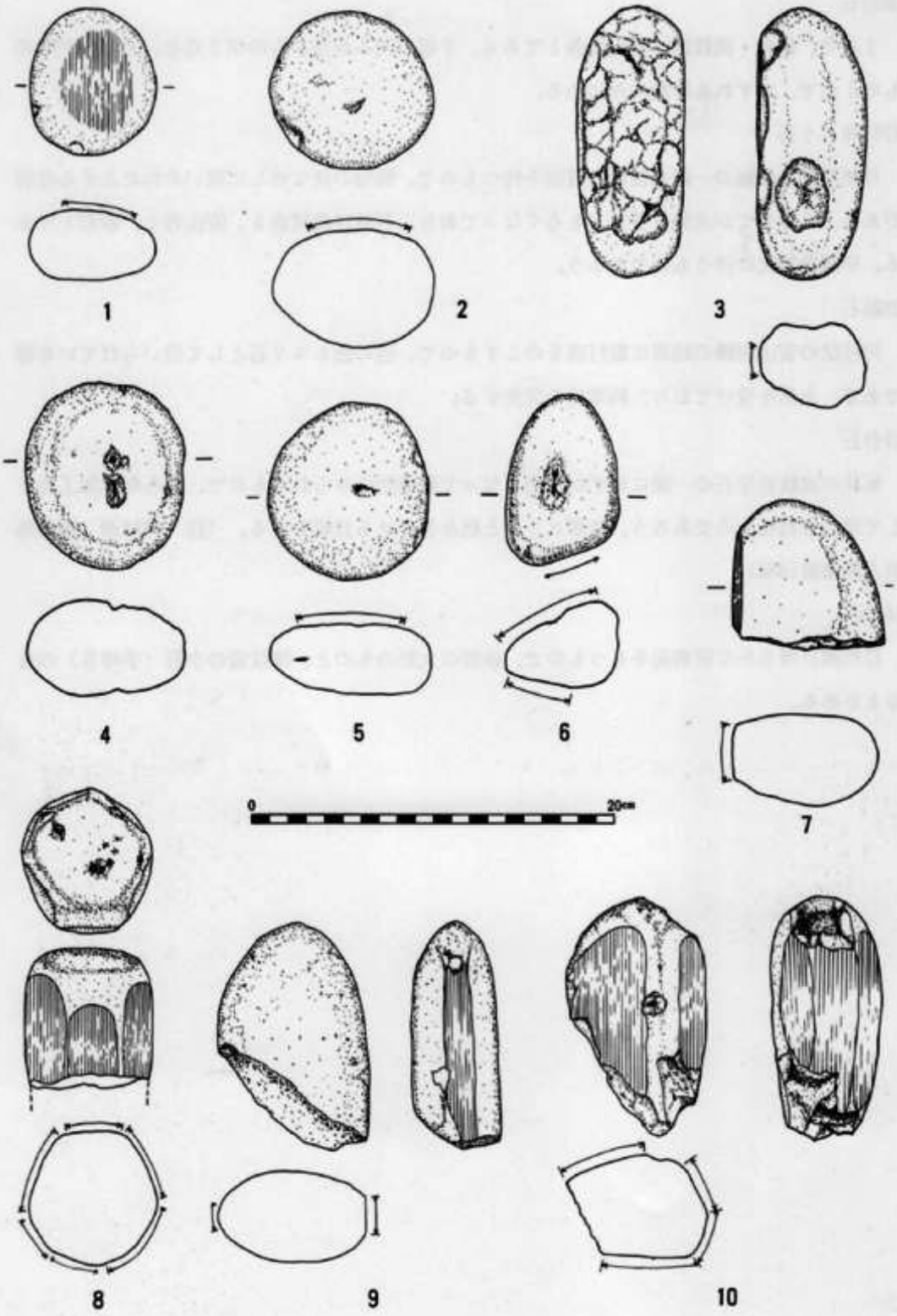
円柱状の安山岩礫の端部に敲打痕をのこすもので、他の面もスリ石として用いられている様である。火熱を受けており、約半分を欠失する。

⒀台石

板状の流紋岩平石の一面にわずかに凸となって研磨面のみられるもので、何らかの加工台として用いられたものであろう。特殊スリ石と組み合わせる見解もある。（註　神村透　開田高原大原遺跡1986）

⒁砥石

自然礫に滑らかな研磨面をもつもので、砂岩の大形のものと、流紋岩の小形（手持ち）のものとがある。



挿図24　石　器　2　スリ石 1.2.5　凹石 3.4.6　特殊スリ石 7.9.10　敲石 8

1．鷹ノ巣遺跡B地点（東より）

2．鷹ノ巣遺跡B地点（東より）

1．鷹ノ巣遺跡B地点（南より）

2．鷹ノ巣遺跡B地点（南より）

図版三　B地点遺物包含層

1．西より

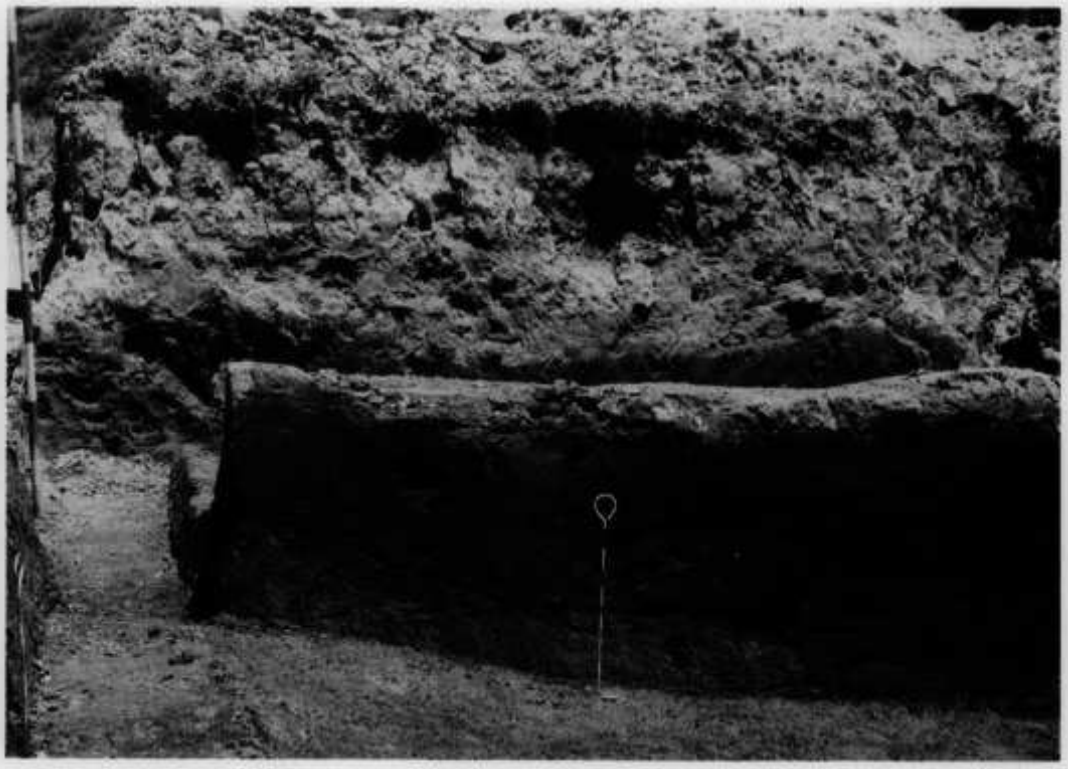
2．西より

図版四　B地点土層断面

1．包含層断面

2．P_1 断面

図版五　尖頭器出土状況



1．出土地点

2．尖頭器

図版六　B地点土層断面―撹乱層上部堆積状況

1．東より

2．東より

図版七　B地点遺構

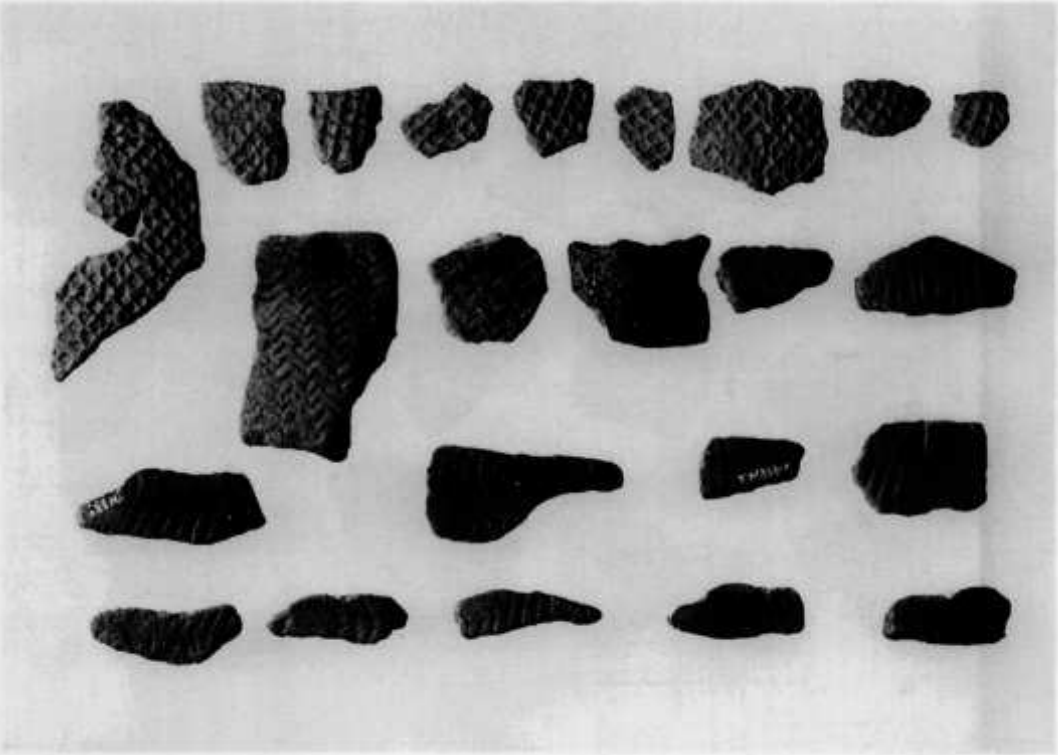
1．第1号土壙

2．表土除去作業

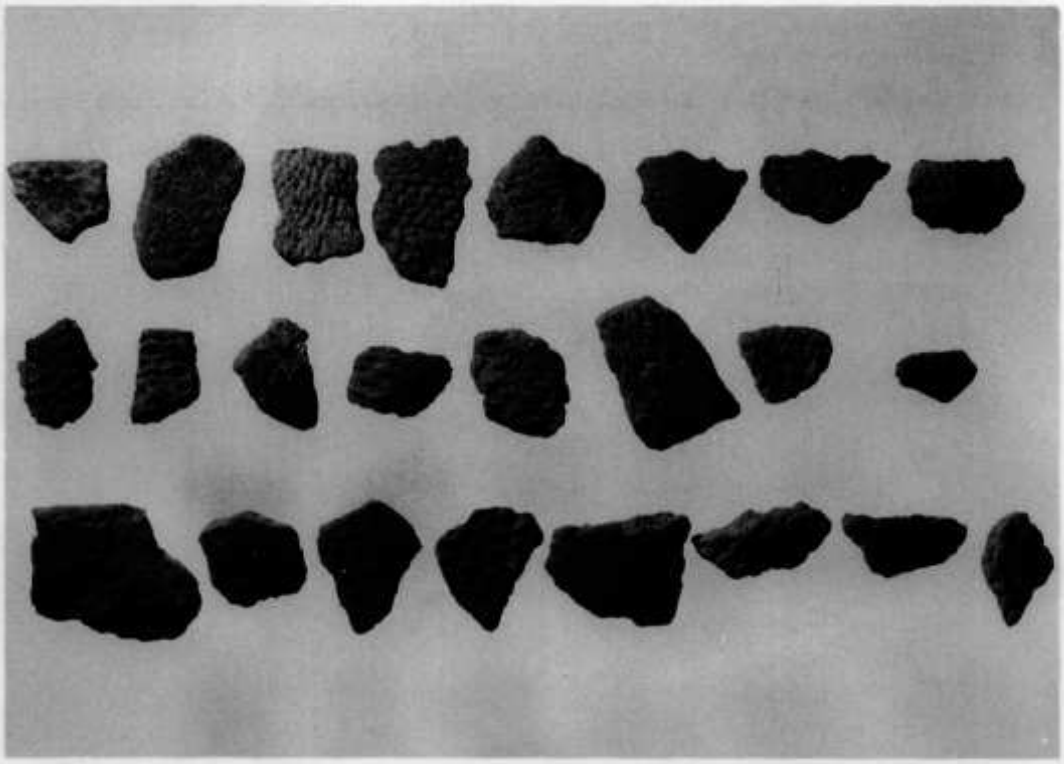
図版八　B地点作業状況

1．南より

2．北より

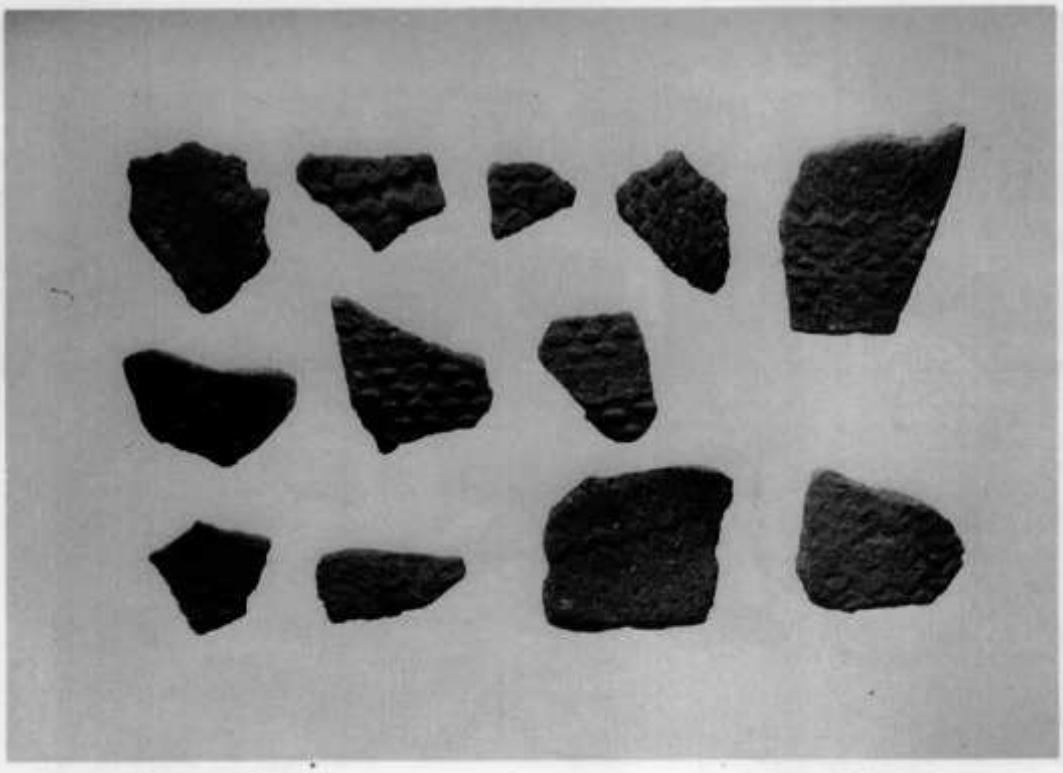


1．押型文土器１（挿図14）

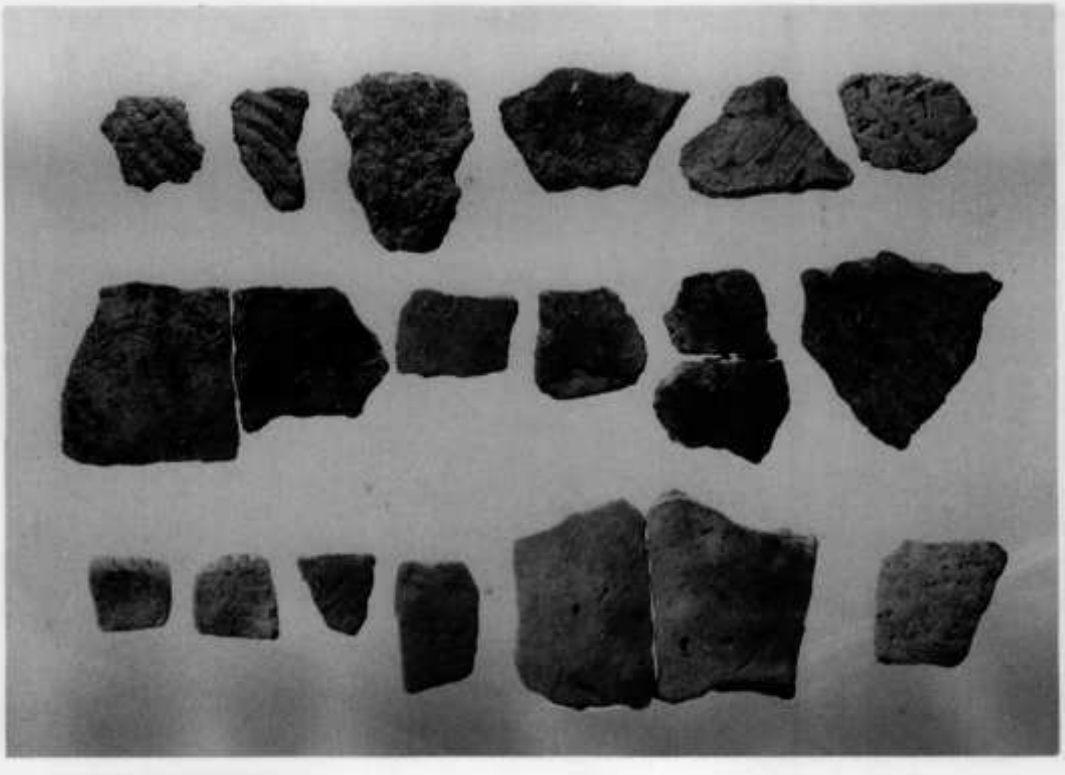


2．押型文土器２（挿図15）

図版十　鷹ノ巣B地点遺物

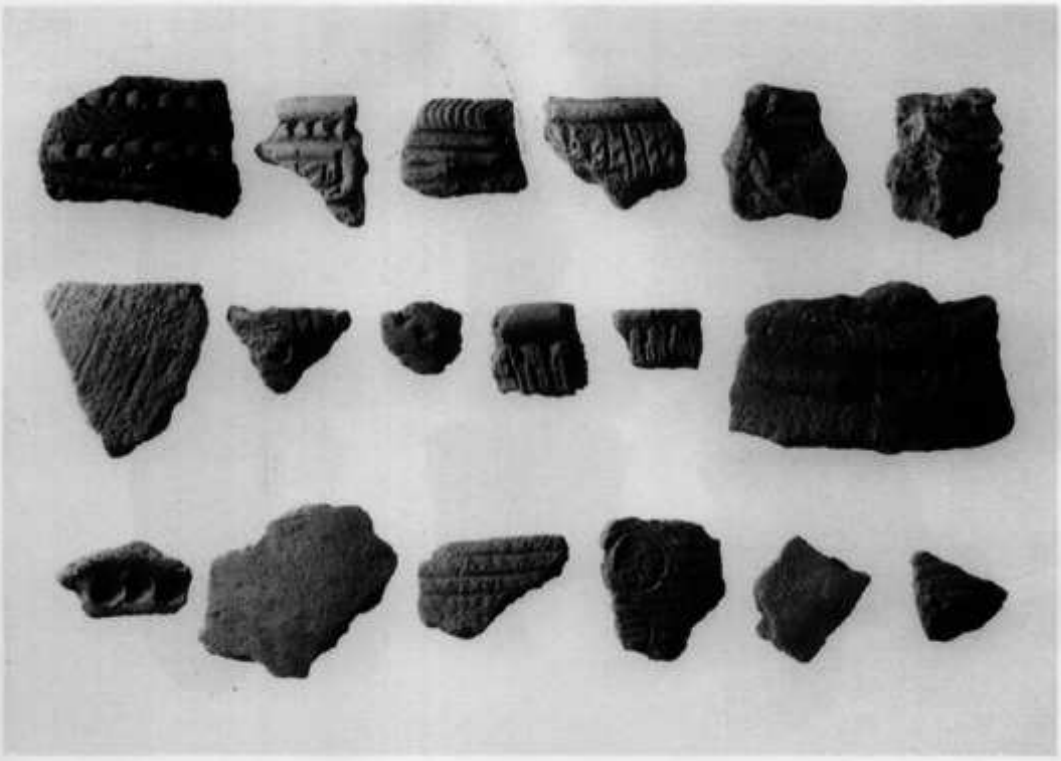


1．押型文土器３（挿図16）

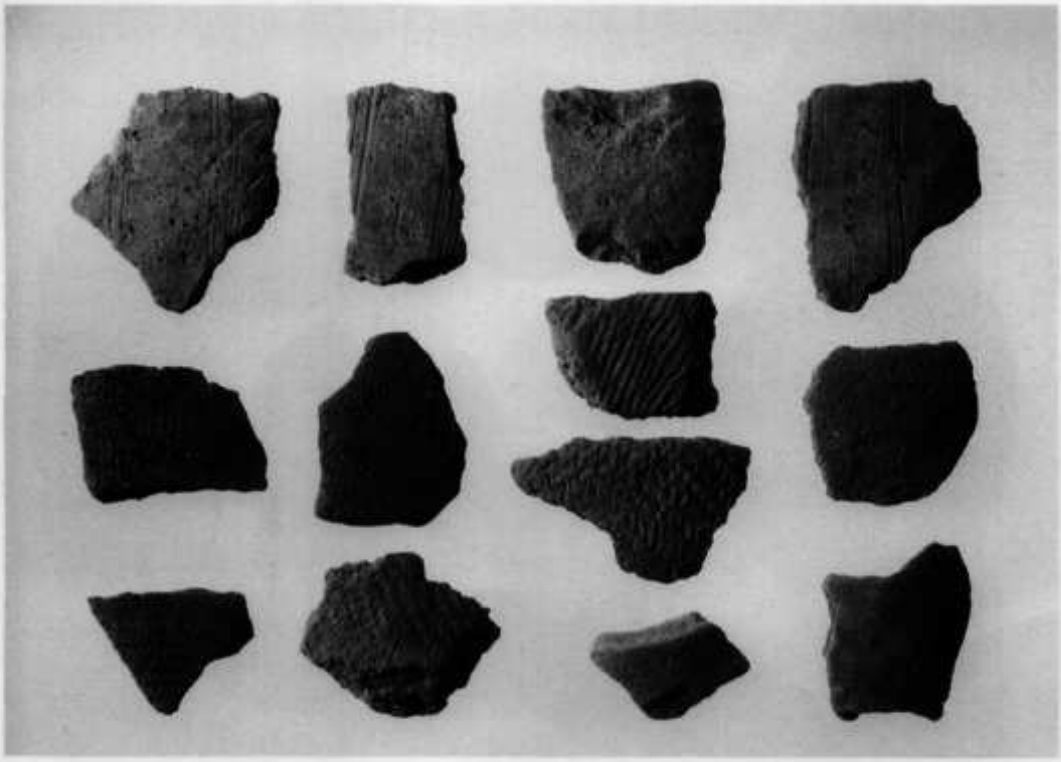


2．早期の土器（挿図17）

図版十一　鷹ノ巣B地点遺物

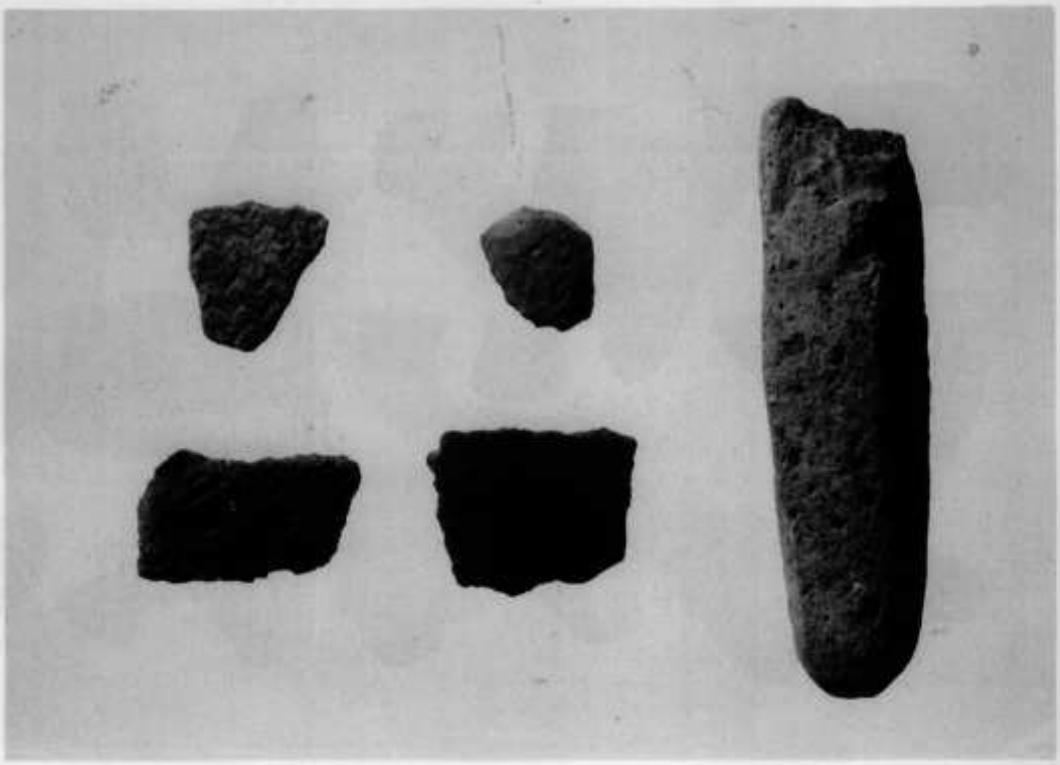


1．中期の土器１（挿図18）

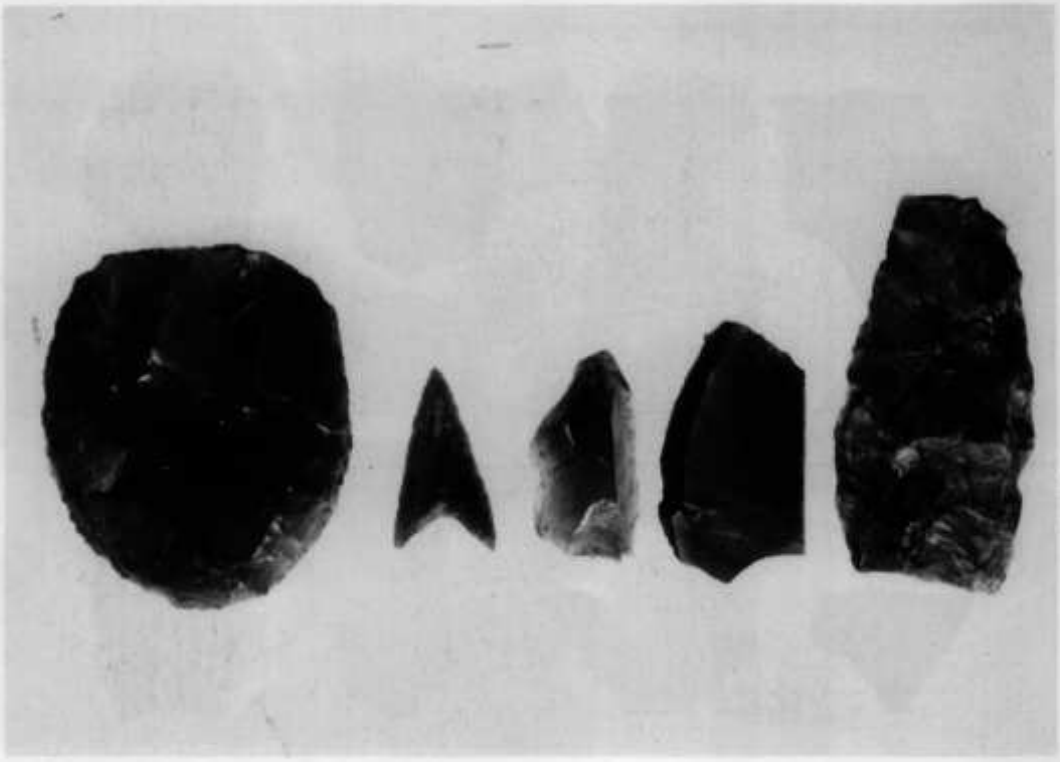


2．中期の土器２（挿図19）

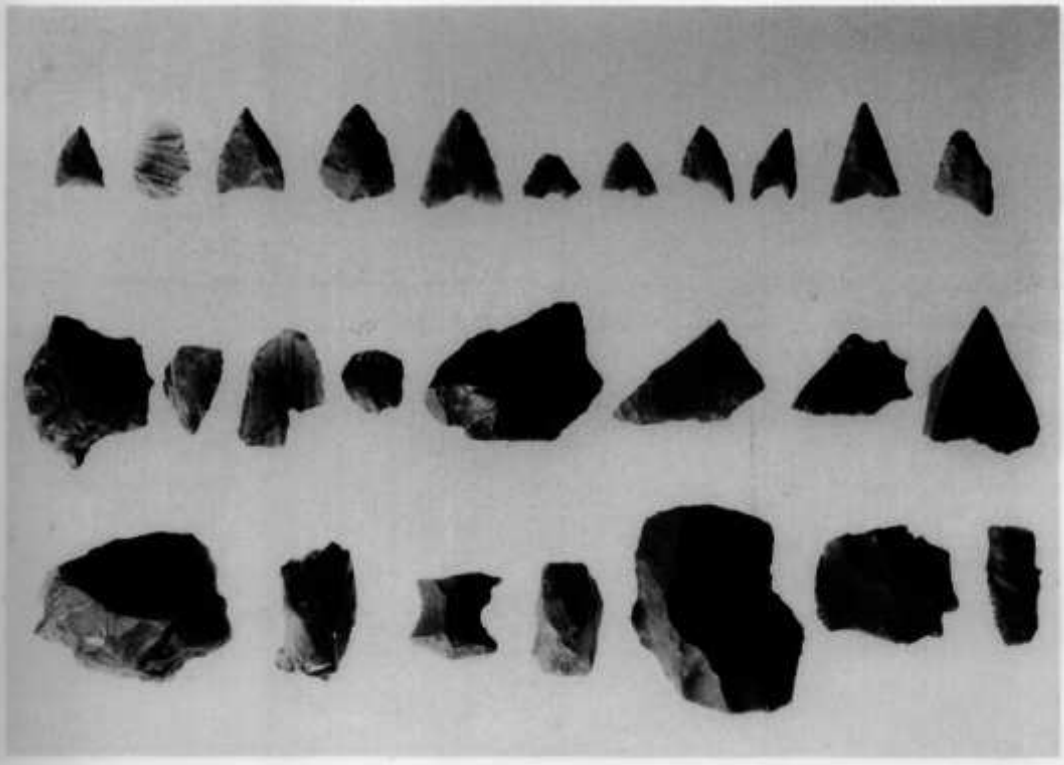
図版十二　鷹ノ巣B地点遺物



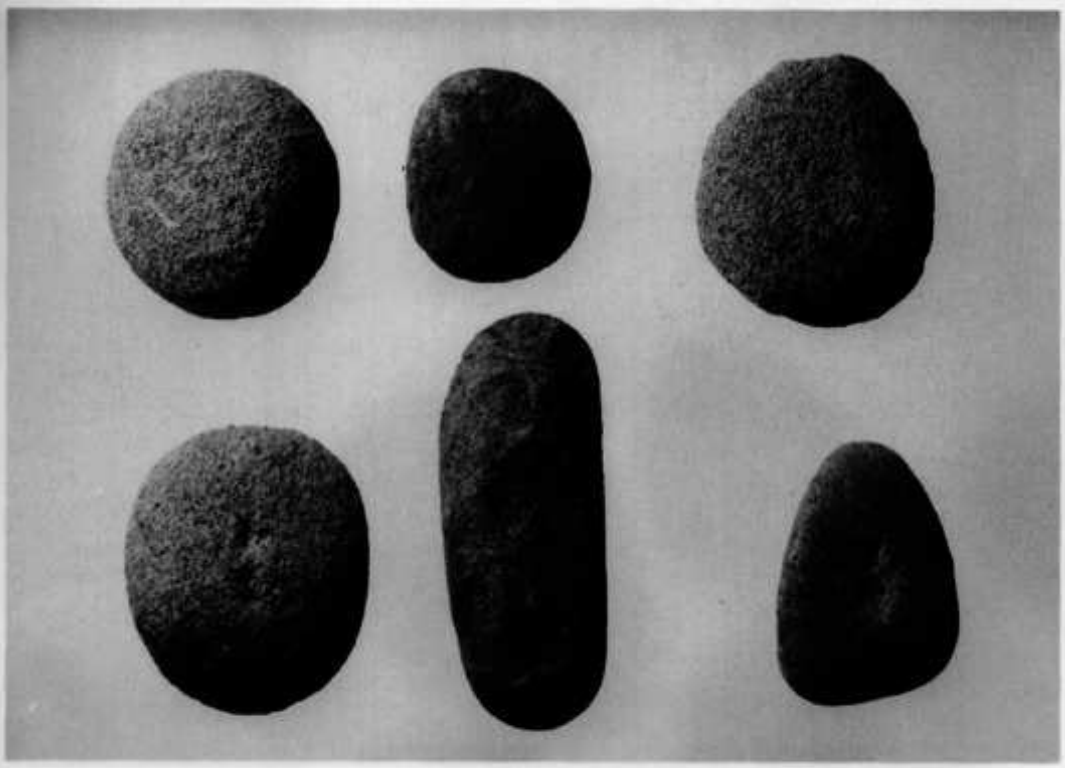
1．遺構の土器・特殊スリ石（SK1.B8.P1）



2．遺構の石器（SK1.B8.P1.Ⅳ層）

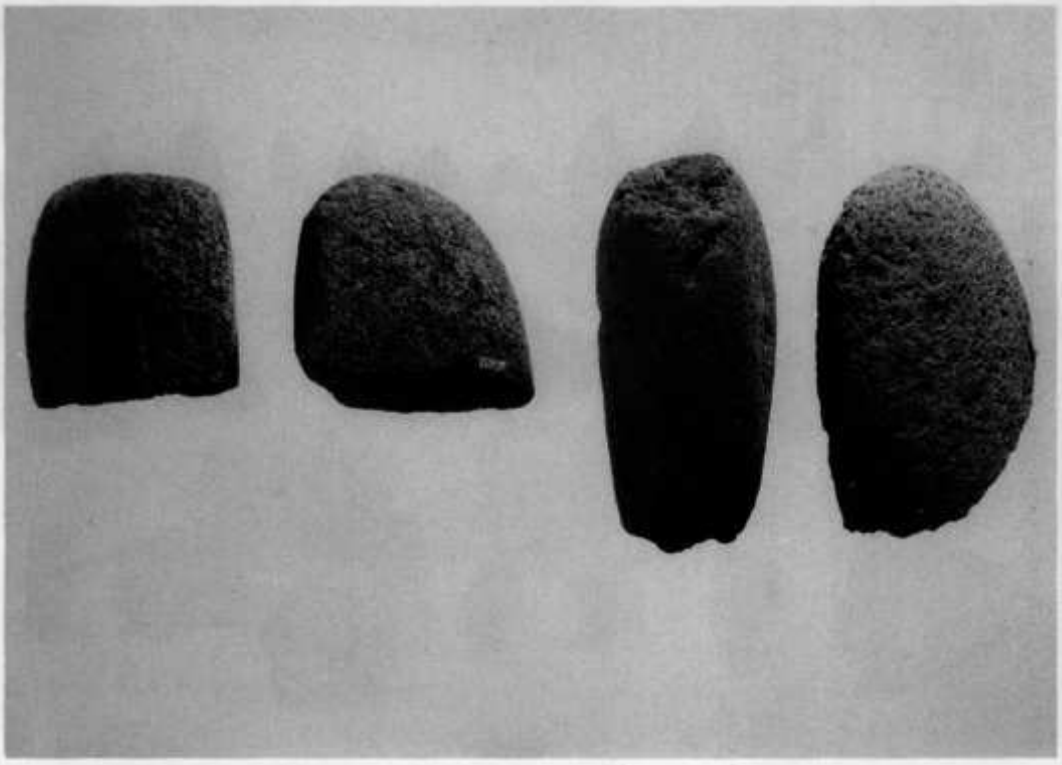


1．石器1（挿図23）



2．石器2（挿図24）

図版十四　鷹ノ巣B地点



1．　敲石.特殊スリ石（挿図24）

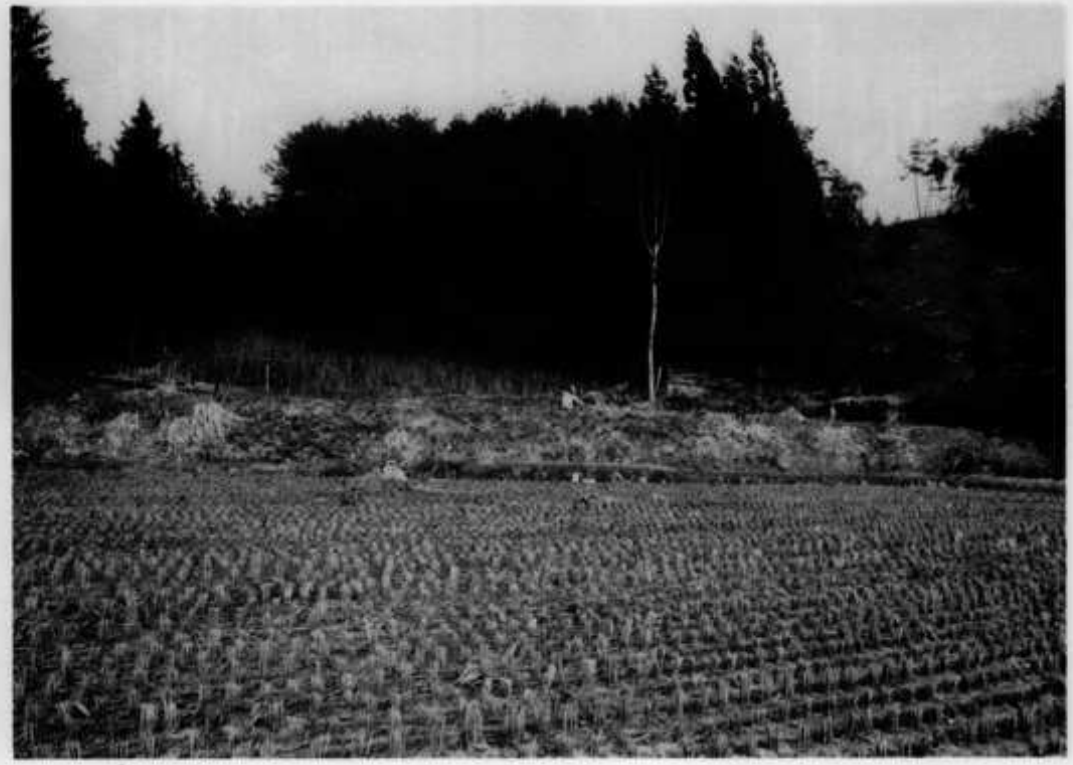
2．　江名子小学校生徒体験学習

図版十五　鷹ノ巣古墳

1．現況（南より）

2．開削状況（南より）

図版十六　鷹ノ巣遺跡A地点



1．遠　景

2．トレンチ状況

鷹ノ巣遺跡A・B地点
鷹ノ巣古墳
発掘調査報告書

平成2年8月　発行

編集　高山市教育委員会
印刷　斐太中央印刷株式会社
高山市下三之町14